●本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

哲學を棄てよ

石川生

一、哲學は死學である

哲學は死學である。哲學は智識の髑髏である。髑髏に何の生命があるか。何の精神があるか。髑髏は所詮墓場の土に腐るべきものである。髑髏を抱いて生命を得、光明を得やうとする者があるなら、其れこそ天下の大馬鹿者と言はねばならぬ。殊に今日の婦人なぞが、譯も分らずに髑髏を抱いて見やうものなら、驚き恐れて仰天し轉倒し氣絶するのは當然のことと言ふべきだ。哲學は死學である。死せる學問である。活ける人間が死せる學問に依つてドウして安立を得られるか、ドウして光明を得られやうか。ドウして生命が得られやうか。思索に經驗の乏しい女子や青年が哲學に首を突込んで、或は「人生不可解」の悲境に落ち、或は冷淡放埒の迷路に彷ふに至るは當然では無いか。

二、哲學を去て科學に行け

哲學は概念の學問である。概念は猶ほ屁の如きものである。屁は尚ほ臭し、哲學に至つては其乾燥無味にして且つ無益なる寧ろ唾棄すべきである。春秋に富める青年男女が有爲の才能を懷いて此の無益の贅物に携はるは惜みても餘りあることである。

哲學は概念の學である。概念は抽象の念である。抽象は尚ほ物の影の如し。影に何の生命がある。哲學書一頁を繙くの暇あらば庭前に咲ける一本の草花を驗せよ。千百人の哲學者の億萬言の説話も遂に慈母が一滴の涙に及ばない。「格物致知」は學問の要路である。生命は具體的の「物」にある。格言を聞くよりは傳記を讀め。議論を聞くよりは歴史を知れ。哲學を去つて科學に行け。

三、危險！　危險！

「科學と宗教との衝突」なぞと言ふことは陳腐の陳腐の菌の生へた苔のむした古い〳〵痴人の夢であつた。死せる哲學を去つて生ける科學に行け。萬物本來の面目を精査せんと欲するは即ち科學である。「人間」自らの本來の面目を打開せんとするは即ち宗教である。萬物本來の面目を明かにして始めて人間本來の面目を打開することが出來るのだ。科學の進路は「信」に至りて究局し、宗教の生活は「信」より始まるのである。哲學は科學より宗教に達する路筋を描いた寫眞となることがある。ケレど寫眞には何の生命も無い。哲學に依て人生の飢渇を醫やそうとするのは、恰も山彦を追ふて人を求むる樣なものである。生ける本體を得ずして遂に絶望に倒るゝに至るは當然の結果である。孱弱き婦人には殊に危險が多いのである。山彦の聞ゆる所、谷もある、岩もある、荊棘もある、斷崖もある、危險！　危險！　青年男女、斷じて哲學を避けよ。哲學は死なり。

四、哲學は死なり

哲學は死なり。哲學は人を殺す。人を生理的に殺さずとも精神的に殺す。假令また人を精神的に殺さずとも社會的に殺す。哲學の智識には温味が無い。恰も灰の如きものである。石油に放火して將に猛焔を揚ぐるに當つても、一斗の灰を之に投ずる時は忽ち屏息する。哲學も亦た之と同じく心の焔を屏息せしむるものである。人の血を冷却せしむるものである。人を枯木の如くするものである。然らずんば人を非社會的となすものである。古來の哲學者にして世の爲め人の爲に努力したものは稀れである。假令人の爲に努力したと言ふも、其は唯だ『自己を作れ』と言ふことを教へたるに過ぎなかつた。而して多くの人は空想の奴隷となつた。多くの人は冥想の道樂者となつた。彼等は不自然の理想又は神を樂みて世と隔絶するに至つた。此の空氣中に起るものは所謂英雄である。英雄とは不自然に自己を作りて以て世を惑はし人を強ゐたる泥棒である。哲學の空氣は英雄を作つた。乍併古來の英雄が世界人類に一點たりとも幸福を齎らしたか。プラトーは懶惰な乞食である。カントは腑拔の阿房である。クロムエルは泥棒である。ナポレオンは馬鹿である。英雄崇拜論を書いたカーライルは鈍物である。英雄と言ふ畸形兒を作るのも、哲人と言ふ冷血動物を作るのも、皆哲學空氣の致す所である。哲人は濁に溺れる水の如く、英雄は岩に碎かる水の如きものだ、其水性たるに於て兩者は同種類に屬する。而して兩者共に不自然なる動物たるに差異は無い。兩者共に自然より死んだのである。死物である。死物を崇拜して何の益がある。哲學は死なり。

五、哲學は水である

哲學は水である。水は、主義も無く、主張も無く、愛も無く、熱も無き人物の如きものである。宗教は火である。物を燒くの火である。バプテスマのヨハネ曰く「彼は聖靈と火をもて爾曹にバプテスマを授けん」と、火は世の改革の利器である。そこで科學は宗教に對して燃料の役を務むる。燃料ありて始めて火が起る。科學と宗教とは到底離るべからざるものであるが、哲學といふ水は到底宗教の敵である。哲學は唯だ「自己」を確立せんことを示し、宗教は自己を沒却して始めて其堂に入る。故に哲學者の面目は冷靜に自ら考ふるにあり、宗教家の面目は熱心に世の爲に動くにある。乍併、宗教も科學も哲學の空氣を呼吸して屢々窒息する　宗教が哲學的となる時は即ち空想の徒事に陷り、科學が哲學に沒落する時は即ち懷疑の岐路に走る。生命は抽象の念に有らずして具體の物に有る。唯物主義は哲學的唯心論よりも遙かに宗教に接近して居る遙かに生命に密接して居る。

米國のプリマドンナ・ノールヂカ女史

六、基督教と佛教

基督の宗教は具体的であつた。佛の宗教は哲學的であつた。基督教は火の如く、佛教は水の如く。基督は改革を圖り佛は冥想を努めた。佛の教は出世間的であるが耶蘇の教は世間的である。兩者の歴史は能く其特徴を現はして居る。佛教に厭世的傾向あるは其教義に基くと言ふよりは寧ろ其教風に基くと言ふが適當ではあるまいか。世間には、佛教を以て哲學となし、宗教に非ずとする人が尠くない。佛教の教風察すべきである。佛教が若し其哲學的大氣の中から救ひ出されれば、宗教としての佛教は遠からず消滅しはすまいか。然るに轉て基督教界を見ると、宗教大學を創設せよの、大いに神學を研究せよ杯といふ説が三四年以來盛んに行はれた樣だ。彼等の馬鹿さ加減は實に言語に絶する。彼等が謂ふべき感覺は今や増々天下に横行して居るでは無いか。何の暇があつて神學などを研究して居られるか。哲學を棄てよ、神學を棄てよ、唯だ涙と誠とを以て人民の中に行け！　人民の中に闘へ！　其處に生命がある其處に光明があるでは無いか。

七、人生は言葉ぢや無い

三四年前には「人生不可解」「煩悶」の聲が高かつた。彼等は饑え渇くが如く生命を求めたのである。光明を求めたのである。然も彼等は果して之を得たか。否々、彼等は遂に何物をも得なかつた。彼等が進みたる路は哲學の道であつた。彼等も多く寺院や教會に突進した。ケレども此處にて得たものはヤハり泡の如き哲學であつた。寺院教會の宗教は即ち言葉の宗教である。言葉の宗教は一箇の哲學に過ぎぬ。故に之を聞ける求道者が多く絶望し、或は懷疑の雲に蔽はれ、或は冷却の水に浸されて、或は墮落し、或は彷ひ居るのは當然の事である。人生は言葉ぢや無い。具體的の事實である。人生本來の面目を事實の上に發揮しなければ彼等の飢渇は醫されぬ。先づ哲學を棄てよ。是れ人生の眞面目を發揮するゝ第一歩である。

●本號注意記事……婦人と演藝……西洋文學と婦人の効績……米國のプリマドンナ……福田女史に與へて婦人解放を論ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人と演藝

無一庵主人

▲婦人最初の出現時代

此には西洋の事から研究を初めるのであることを先づ斷つて置く。普通一般の人の考えでは、婦人が演劇の上に現はれたのは僅かに近時の事であるとせられて居る。十六世紀中に其事ありしは一少地方にして、先づ十七世紀より之ありたりと考へられる。然しながら、此考は既に多數の人が氣付いて居る通り、誤謬である。婦人が演劇の歴史に現はれたのは決して新しいことでは無い。婦人の演劇發達に及ぼした効績と言ふものは遙かに遡つた中世時代より現はれて居る。丁度第十世紀の後半期頃からのこと。吾等は是より歴史上の精査論議に進む。吾等は據て知る、昔の演劇は宗教上に起源することを。されば此基督的芝居が其宗教中に生長したといふことは異とするに當らぬ。然れども希臘の芝居に婦人の加はり居つたことを除いては、吾人は古代の劇場に婦人の出現せしことを發見し得ない。ドラマ的藝術の進歩の上に婦人が重要、貴重なる要素となるの機會を得たのは、實に基督教が婦人の地位を向上せしめたからである。

其新たなる基督教芝居と古き芝居との間に、何等直接の關係無く古者が亡びて久しき後、新者始めて生れたりとの說は、殆ど一般に承認せられた說である。が、此說は未だ精確とは言はれぬ。ドラマ的精神の生命は曾て全然消滅したことは無い。各時代を通じたる、連鎖を斷くことは無い。唯だ其連鎖の最も重要なる點は基督教婦人の事業たる所謂第十世紀の喜劇是ある。

第十世紀の喜劇と稱する如きは年代に誤謬がある樣に思はれる、蓋し當時は宗教的思想集中時代にして、又、シャルル大帝國衰亡後の政治的紛亂無秩序の時代であつた。

▲暗き森林中の尼寺

基督教社會の大部分はクリスト時代一千年期の近よるに依りて世の終が來るであろうと期待して居つた。コンな時代であれば藝術や、文學の復活には決して好ましき時期とは思はれない。從て人々は此んな時にドラマの詩や劇場を見ることは不可能なりと考えるであろう。然るに此時、ガンデ河の岸に沿ひたる獨逸の暗き森林に隱れし僧院の奥からして、ドラマ復興の最初の響が起つたのである。

此響は婦人の聲を以て起された。ガンデルシャイムの尼寺はサキソニー候ルートルフの建立したのである。此人の父は彼のシャーレマンに征服せられし有名なるヰッチキンドといふ人である。其建立後數年間其比丘尼の最多數はサキソニー候家の同族であつた。其比丘尼の一人に、東洋の皇帝の王女にして希臘の貴族があつて、此人は高尙なる文物をコンスタンチノープルより遙かに隔てし日耳曼の邊陬に齎したと、歴史家は言ふて居る。

▲優しきロスヰター尼

ソは兎も角も、ガンデルシアイムの僧庵がバーバリズムの砂漠の中に一の智識的綠地となつたことは確かである。彼のロスヰターといふ優しき尼が生活し又た葬られたのは實に此處であるロスヰターは今日に至りて尙ほ一般に傳はり「普通ガンデルシャイムの尼」と稱せられる。彼女は其傳說史詩をものすにラテン語を以てした。其六か七かの喜劇は吾等に非常な興味を與へる。吾等は彼女の作物中に含まれたる其人格の說明を除いては彼女の生涯に就いて少しも知ることが出來ぬ。唯だ彼女は吾人に傳へる、彼女が、クラシックの智識を得、文學の才能を得たるはゲルベルク姬(王姪にして尼なり)及びリカルデに負ふ所最も多しと。

ロスヰタはラチン語を以て書いた其樂譜は六脚詩體か又は輓歌體で、其芝居、所謂喜劇は散文體である。其ラテン語は正確なるもので、中世の所謂『惡所』ラテン語に遙かに立超えて居る。ロスヰターは古代クラシック作家の思想に親しみ、基督教傳說の豐富なる敎訓や、敎會の長老等の宗教學を深く究めて以て能く詩句を創作するに至つた。希臘及び羅馬のドラマ作家中に於ては唯だテレンスを知つて居たのみの樣である。ロスヰターが其ドラマを書くまでに鼓吹されたのは、テレンスの天才と詩風とであつた。併しテレンスに道德の欠けて居つたことは彼女が頗る厭ふた處であつた。ロスヰターは其素志を議て曰く『吾は異教婦人の放蕩の狀に更ふるに純潔なる處女の崇高なる譚を以てしやうと思ふ。吾は吾が淺劣小弱なる才能の及ぶ限り、貞操の勝利殊に婦人の柔和が却て男子の蠻勇に勝つことを稱揚したいと努めた』と。

▲彼女のドラマの價値

ロスヰターのドラマの價値は主として其對話にある。其思想の豐富精緻に、其無垢なる時の精神に、其女子の生活の面目にある。而して之れ吾人が上古の文學に見ざる所である。

ロスヰターの著作は過渡期の作物として最も重要なるものである。蓋し彼女の著は其モデルをクラシックに取り、クラシックによりて鼓吹せられたとはいふものゝ、是れ實に後の基督教時代のドラマとなりて發達したる新内容と新形式とを創始したものである。

(つゞく)

個人消息

▲田中正造翁(石川宛)

先頃不敬罪中爲(記者曰、石川の獄内面會)恨々々老生はあれから代々木、夫から病院代議士大竹氏を訪ひ又明治女學校の廢止跡を見舞、夫より上野に參宮、途中の雨に濡てなつて上野前に逃げ込ました、此頃は大敵前のみならんや(三月四日)

▲逸見斧吉君

鐵世界の梅も見たいが、引込んで書物も見たいろうかと思ふと、田中翁の頼まれしものも、書かねば濟まぬ氣もする、兎角迷ひますので、兎も角も明日必ず參上するさも申兼れて『アテにしないで下さい』と申上る事にしました、もし行けば午前中に參ります、田中翁から來ても中に一晉春雨に寂寞の夢をおどろかす、うぐひすに候はも無し。と、(三月十三日)

▲西川文子君(福田宛)

いつのまにか冬は過ぎ春らしく相成ました、如何ゐらせられ候や世界婦人參らぬので御案じ申居候禁止にては無きや、御やめ遊ばしたのではなきかと、如何承り度候、石川樣、神崎樣、如何に候や、逸見樣、木下樣、あなた樣の時々おとづれ給ふ方々へはよろしくと御傳申上候、千葉にても壯健に候仲になれば、いつにあれはと思ふのみにて未だ文參らず殘念に候 三月七日)

▲伊井蓉峯君(福田宛)

當地興行も意外の好結果にて未熟の技藝に花を飾り候段偏に厚き御同情と御加護を仰ぎたればこそと感謝罷在候愈本月廿一日を以て當地千秋樂と仕り、直に歸京四月三日新富座に於て開演仕候に付、何卒倍舊の御引立を蒙り度切に奉希望候 謹言(三月廿日大阪道頓堀角座より)

▲長加部寅吉君(福田宛)

どうも御無沙汰がお苦しからうと、其の事のみ案じられます、然るに私など意久地がなくて、何時もく前今切れのみいたし何とも申譯ない次第であります。終りにあなたの『亡母の紀念』最後の一節は、等しく母を失ふて悼惜な方なき私の、常に切に心に感じて居る所と符合いたしまして、大變心の慰み勵みとなりました、どうか不肖成すなさの私ですが、驕泥に附して賜ふ事を許して下さいまし(三月十九日)

▲村田四郎君(石川宛)

世界婦人の罰金は五圓と言ふ樣に見へましたので此れ位ならと思つて居ましたら今日岡野君からの手紙で百圓と聞き驚きました。倫理の絕對的命令と言ふ事は倫理學研究範圍に於て決せらるべきものでは無くて『信仰』界の領分であると思ひますが、僕の考へ方から見ますと主觀上に其れを確立し得るさならば直ちに取つて客觀の上にも及ぼし得べき者かの樣に存ぜられます(三月十五日興津より)

▲渡邊政太郎君(石川宛)

チロッと御伺ひ致し度くと思ふて居りましたが、ゴタゴタして居て遂ひ御無沙汰致しました。先日の裁判は五圓ですんだとのも、マア宜しう御座いました。(三月六日麻布より)

▲橋井清五郎君(福田宛)

はゝの君うせたまひけるよしなりて、あはれさは世にあるへのわび言ぞ、みたまはやすし神の御許に(神田橋より)

▲櫻井松太郎君(石川宛)

靜岡縣下遊說中、去る十七日午後五時、大宮在に於て暴漢の襲擊に會ひ戰鬪の際手を負ふて鵜飼惣宣君と共に歸京仕候、同地は一体に富士製紙會社によりて、衣食するもの多き所にて、小生が同會社の罪惡を、猛烈に攻擊せし爲め、遂に此病を貽ひたるもと存候、傷の治療には二週間を要すと申候(三月廿二日)

▲大石緑亭君(福田宛)

貴姉は如何ですか、此方はいつまでも寒くて弱ります、每度歸寂御送り下さるにも係らず、私方よりは久しく、無沙汰して、誠に相濟みませぬ、實は昨冬以來屢々風を引き近頃はローマチス性足痛を起し何の活動も爲し得ずに暮して居る次第ですから惡からず、年末來石川兄殿の御社中一同へよろしく御傳を乞ふ

▲幸德秋水君

此頃病所の千駄ケ谷に轉居したる由

▲松崎源吉君

出獄以來西梅館食にて、目下夫人かき子君と共に本郷千駄木林町二二四に再び家庭の人となりて靜養し居る由

▲小田賴造君

久しく高野山中に修養し居りし同君は此頃上京上野谷中に止宿したり

監獄ぶみ

獄中消息

▲赤羽一君より(石川宛)

久しく無沙汰なした、君は歸省かれ、僕にどうにか斯うにかして居る。歲月電光の如し、寒いくと言つてる間に早や陽和麗麗の候となつた、寒氣に閉ぢられた囚人の心も花と共に開かんとして居る、種々君に話みたい事があるが第一寄物だれ、宮監獄は檢閲が嚴重で、看護不許のものが頗る多い、從て今讀む物が殆ど無い、始末、此間逸見君が送つて吳れた七冊の中許可になつたのは一冊しか無い有樣、しかし新聞に差入れて貰つても、不許になる樣なものは仕方がないから之れなら大丈夫さ思ふ本を精選して申上げるから逸見君や渡邊君と相談して大至急送つて吳れ給へ、進化論社會學研究、米國の農民、村國の樂園、日露戰爭文集、萬朝牧詩集、聖書、米國南北戰史、レパブリック社會進化論、以上八冊は渡邊君の所にあり、羅馬五十年史ギボンの羅馬史、ルーソーの懺悔錄、以上は安藤さんから借りて吳れ給へ、インガソールの自傳、バーザン、ゾイル、露國の農民、獄人日記、所有權の論史、以上は東京監獄より、宅下げせし物の中にあり、之れ丈け頼みます、尙は差入の節は役人樣の便宜の爲に原名と譯名とを忘れずに表紙に書いて送つて呉れ給へ、逸見君書物と手紙有難う、種々心配をかけてスミマセヌ、其内に又手紙を上げます、渡邊君に移轉した宿所を知らせる樣に傳へて吳れ給へ、松崎君の、出獄後の健康は如何、進化論、評論と森林『クヤンゲル』とを差入れる樣に御傳へを乞ふ、△監獄は隨分寒しいが、神妙に勤めて居る、さへ居れば自づと自由の時は來る、タイムは、絶大なる解放者である、福田女史の御病氣如何、宜しく御傳へを乞ふ、堺、吉川、森田、谷田、守內、野澤君始め、同志諸君によろしく、三月十二日

△來月にでもなつたら、逸見君と一所に一度面會に來て呉れ。

△家人はどうして居るかれ。

△資本論を貸して呉れ給へ△當監獄では差入書物の册數の制限は無いさうだから心配せずに送つて下さい

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

西洋文學と婦人の効績

帆雨樓主人

▲クラレック時代＝サツホー

西洋文學上に於ける婦人の効績を研究するには之を左の四節に分つ方が便利であると思ふ。

第一、クラレック時代に於ける婦人の文學的効績

第二、歐洲大陸に於ける婦人の文學的効績

第三、英國に於ける婦人の文學的効績

第四、米國に於ける婦人の文學的効績

是である。今回は先づ、此第一項だけを說き、次弟に號を追ふて序述することに決しやう。

此クラレック時代、一千年に充たざる間に、婦人の天才が既に非常なる高所まで其進歩を遂げて居たと云ふとは、殆ど奇異な事に思はるゝ。而も之れが、一個の婦人を通して、其一婦人の周圍に集められたる一團によりて、成し遂げられたのであるから更に面白い。サッホーと言へば知らぬ人はあるまいが、彼女は耶蘇紀元前六一〇年レスボスといふ所の山地に於て生長した。此地は當時他の地方に見ることの出來ない程、婦人が自由を有し、又、教育されたのである。而して彼等に最も幸福なとは此地では主として婦人の手にて、頗る立派なパンが製造せられ、其評判は二千年間傳はつたと云ふとである。料理法に就て一書を著はしたる希臘人アーテニーストラタスと云ふ人は、若し萬の神がパンを喰ふものであつたならば、彼等はキツト使者をエレッス…サツホーの生所…に遣はして之を買はしむるであらうと言ふた。

『希臘美文集』中に『神の詞藻』を傳ふる者として七人の女子を列記して居るが、サツホーは即ち其中の首と認められてあつた。當時の希臘人中では『男詩人』と言へば直ちにホーメルを指す如く『女詩人』と言へば直ちにサッホーを意味した。ストラボといふ人は云ふて居る。某時代より少し以前には『サッホーは驚くべき人物である、少くとも詩を以て彼に匹敵すべき婦人は有史以來曾て見ざる所である』といふ文字が流行して居たと。彼女とアルケアス（彼女と同町の人にして恐く彼女の愛人ならん）とは、世界序情詩の創始者として結ばれたる者であるピンダルとアナクレオン、ホレースとカチユラスは即ち之を模倣したものであるアルケアスの詩はホリアムジロンス氏が譯して居る。What constitute A state は即ち其初の詩句である。併し彼の詩もサツホーの詩と同く僅かに片々になつて殘つて居る。其中にサッホーに送つた一句かある曰く、Violet crowned, pure, sweetly smiling Sappho

プラトーは彼女を第十のミューズと稱した。ソロンは彼女の詩を讃美して、吾が心情を以て之を解し得るまでは、何卒死たくないものだと言ふた。數世紀後に生れた、羅馬のオヰッド（有名な詩人）の筆で彼女に關する傳說を生じたが、今日は其根據無きことを承認せらるゝに至つた。殊に獨逸のウエルケルが『普通の偏見を以て說かれしサッホー』と言ふ著作に依て此事が明白となつた。サールサール僧正は此書に就て次の如く記して居る曰く此人の品性に就ては多くの世紀間無數の非難があつたが、此の好なる近世批評の為に救はるゝことが出來た。サッホーの柔和なる、ともすれば顏を赤らむる程であつたことが想はれる」など。

近世の詩人中サッホーの天才に就て最もよく稱揚したものはスヰンバーンである彼は曰く『現存する彼女の詩句は、最上の成功をなし、詩的藝術の極點に達したものであると。更に彼の讃辭に記して曰く『予は彼女の形式中に予の精神を投せんと努力した。其詩句に非ず、其詩人を表顯せんと努めた』と。又、己が『朝暾の前の歌』に於て彼女に就て記して曰く

[illegible], ○ Gods daughter, subtle soul

一八八五年オックスフォードのメキッドスコットは彼女の詩篇の一小冊を發行した。片々となつた原文と其精確なる譯文とを合せてある。故ヘンリー、ホワートンの編輯したものだ。

クラレック時代は以上に止めて次回には歐洲大陸に移る。サッホーの優雅なる肖像は本紙第六號に掲載してある。

米國のプリマ・ドンナ　ノルヂカ女史

▲米國の樂壇

米國に第一流歌妓の現れたのは十九世紀後半のことである、併しながら、其近來の進歩が尚ほ其將來を照すものとすれば、米國の歌妓が歌劇の女王とし、音樂の世界に永く君臨せらるゝに至るは蓋し近時の內にあるべし。

米國プリマ、ドンナの歴史は南北戰爭時代に始まれりと言ふとが出來るか、其より少し以前に、デレド・フイリップスといふ婦人は伊太利のオペラで初舞臺をして成功した。亦之と同時にイサベラ・ヒンクレイもアムステルダムで舞臺に立つた。乍併、廣く歐洲人の注意を引いた最初の米國シンガーはクララ・ルイズ・ケロッグ女史である女史は一八六一年にニューヨークに現はれ更に六年の後倫敦に現はれた。又、此時に當り、アンニー・ルイス・キャリーや、エムマ・アボットや、エムマ・アルバンニ等の諸婦人が世に出でた。彼等は北米の女優と仰がるゝに至りし前に、皆外國で修養し歐洲の舞臺で演唱して來たのである。少し後れては、マリー・ヴン・ザントや、エムマ・ネヴダや、シビル・サンダーソン等の婦人が同經路を辿つて現はれた。他方には、ミンニー・ホークや、マリー・デュランドは、最初米國では地味にやり初めたが、外國に渡つて大成功をした。

▲リリアン・ノルヂカ

さて是れより、現在生きて居る樂界の大名家に移るのである。が、今日此處では唯だノルヂカ女史のことだけを申して置く。此最近の而も最も光彩ある米國ドラマ史は之をニューイングラントの二人の娘より離すべきは動かすとの出來ないとである。二人の娘とは誰だ、他なし、アン・ノルヂカとエムマ・エームス即ち是である。而して、リ、アン・ノルドン（音樂界にはノルヂカと通稱せらる）が過去三十年間の米國プリマ、ドンナの代表者として、米國の首位に置へらるべきは當然である。彼女はニューイングランド音樂學校に於て修業し、ボストンに於て音樂會シンガーとして初舞臺に出た。其後オペラ樂に對する希望より伊太利に游學し、ヰオレッタ殿の役を務めて名聲を博した。かくて漸次に、彼女は自らをドラマ藝術の最高位に到達せしめた。殊ペテルスブルグ、パリー、及ロンドン等に於て引き續いて歡迎を受け、獨逸に於てはワグネル派ヒロインとして彼女を讃美した。一八九四年ベイリユーに於て演唱の後、躁を働らして翌年米國に歸つた。そして首都に於て最大なるオペラ歌妓として現はれた。彼女は一昨年末にマンハッタンのオペラに出勤して居た。昨年の冬には再びニューヨークに來るだらうと云ふ評判があつた。

前面の美しい肖像は即ちノルヂカ女史のである。次回にはエムマ・エームスを出すことにしやう。

▲小說脫殼八〇の続き

『何故ですか』

『何故つて貴方、貴方が、戀の脫殼であればこそ、私の様な人間を負ふた者も、思ふ存分に打込んで居る氣にもなれますわね』

僕は最早堪え兼ねた。併し努めて心を抑へながら、

『兩手を入れませんか、寒いでしやう？』

對代君はマダ少し不安の眼を開いて、

『ね、そうでしやう』

僕は眼を閉ぢて、胸の鼓動を静めやうとするが、仲々靜まらぬ。夜衣が重く押迫つて來る、床しい香と熱い呼吸は僕の頰に接近して來る、館には笑の[illegible]がする。朝日の光で、[illegible]が解けるのだ、隣の向ふの[illegible]の中で、手飼の鶯が一聲二聲（続）

○大賞堂の春季大賣出し

天賞堂にては本店各出張所共例に依り本日より大賣出しを擧行し割引景品商品切手一等百圓宛貳等五十圓宛數千個以下各等八等迄數萬個を一般顧客に呈するよし特に商品の如きは歐米製造元より右商の斬新流行金銀時計寶石類を始めとし同堂の新案妙技に成れる[illegible]の美術工藝作裝身具飾用品[illegible]及び日本諸小間物等に至る迄內外の諸雜貨無數を陳列場に出陳し日々新品と差替へ汎く衆庶の[illegible]に供し專ら顧客選擇の利便を謀るに勉むと云ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

我が魂と語る

小野有香

天地も崩れよと大地震が揺つた或晩のことでした、晝の疲れにぐつすりと寢込んで居た私がポカリと眼を開いたのでした、醒めて居てか、眠つて居てかそれはわかりません。――何時だかもわからないのです。いつも床に入る前には必ずランプを襖の外に出して消すのですから、光のありやうがない、闇いのも其筈です。

すると何だか恁う私によく似た姿がおぼろげながら紫の雲にとりまかれて室内をさまよつて居たのでした。(後で考へると彼んな眞黑な闇の夜にどうして其姿が見えたのかと怪しまれるのでした、併し實際見えたのが不思議ですね)、――私はあれは自分の影なのかも知れないと思つて別に氣にも懸けて居ませんでした。

若し私自身の影であつたらとヒヨイと氣が付くと同時に、其姿のものが段々とうすく消えかゝつて空へ上らうとするのでした、そして度々後ふりかへつて私を眺めるのでした、から何か談でもしたいやうな、又どうも離れともないやうな風に見える――。はてな、何だらうと考へて居ると、(考へたのか考へられたのか能くはわかりませんがどうも考へて居たやうに思はれるのでした)身體がピヨン〳〵と躍りだして來た。ひどい地震のために揺れて居るのでした。

――此時間私はハツと自分の魂が居なくなつたことに氣が付くと同時に、あれが我か魂で、今脱け出やうとするのであることを覺り得ました。道理で度々あとふりかへつて離れともない風に見えたのでした。

――誰が又あれが私の魂であるといふことを知らして與れたのでしたか、それは未だにわかりませんね。

いや大變な事になつた――何でもかでも呼びとめねばならない――。

「おいおい魂君、君はどこへ行く？今時分に――。」

私は大聲になつたのでした。

「おゝ肉體君、覺めたのかい。君は嘸驚いたらうなこの大地震に？」

「驚いたの驚かないのつて！」

『驚いたらうな、ほんとうに。弱い君の事だから無理もないさ！」

「えゝ、何だつて？」

「いや何でもないさ」

と魂はいやに沈着いた口調で澄して居る。

「そんな事はどうでも可いが、君は今時分何處へ行かうてんだ？」

私はせき込んで右樣糺いた。が、魂君は平氣な顔して答へました。

「あゝ僕か、僕は熟々浮世が厭になつたのさ、で、これから一つ天國とやらいふ極樂淨土へお詣りしようてんさ」

「何故だね？おい君、浮世は今春じやないか」

「春でも何でも浮世は畢に浮世なりけりさ。僕は熟々君のやうな弱い躰に愛想がつきたんだ。もう何もいうて與れるな、なまじ引きとめて與れるよりか僕が天國とやらへ行つちまつた後で、哀れともおもはゞ生前の――おつと、じやない、分離前のよしみじや、一片の朗吟でも唱へて與れゝば、何よりの功德に思ふよ。」

「おい君、そりや何をいふんだね、僕こそ君に愛想がつきてるんだもの、その事なら僕の方からいひたい位だよ。實に意思の薄弱なことつたらお話にならないじやないか。これまで一として滿足にやり遂げた事があるかい？、おい君！。君がそんな調子でいつも薄志なものだから、僕畢に弱行ならざるを得ないじやないか、男一匹廿八と生れて蒲柳の質、弱きが僕の生命だとは情なさすぎるじやないか。これも誰のお蔭だい、君!!。皆んな君の薄志に由るんじやないか。あまり大きな口をたゝくもんじやないよ。」

流石の魂も少し憤然として、

「おい君、勝手な熱を吹くもんじやないよ。いつも僕があゝせよかうせよと吩咐けても、君はいつも今日は頭が痛いの、いや今腹が痛む、今夜は厭、明日は何と勝手な眞似ばかりして、いつとて滿足にやつて與れた事があるかい!?。だから僕は常に快々として樂まないのだよ。樂がなければ此世は闇だ、闇の世で苦勞するよりや僕はアダムとなつて追ひ出されるまでも天國とやらをさまようて居る方が、結句氣樂だと思ふのさ。じや左樣なら」

紫雲がポツリ〳〵とたなびいて少しづゝ上昇するのが能く見える。私は寢ながら手を伸して引きとめやうとしたが、微かな風に聲があつて　魂君はヒヨイと一段高く昇つた。エヽしまつた――。私はもう氣が氣でない、そこで思はず大聲に呼びとめた。

私は其時もうオロ〳〵涙聲になつて居た。今魂に飛び出されては、明日から、否只今直ちに困ることが生ずるかも知れない。たとへば明目が眼を失つた如く、盲者が杖を失つた如く、魂は私共になくてならぬことは前より聞いて居たので、今之れを思ひ出したのでした。――誰が思ひ出して與れたのかは知りませんけれど。

私が涙聲に呼びとめたので流石に氣の毒に思つたのか、魂君はまたも私の身近に舞ひ下つて來た。矢張り紫雲の衣を着て居る。聲も私そつくりなのがをかしい氣もする。私は思はず奇態な事だと思はれましたので、ほゝゑんだ。魂君もほゝゑんだ。

「何だね君？」と魂君は私に尋ねました。

「何だつて君、あまりに素氣ないじやないか、も少し考へ直して與れても可いじやないか、滿更他人でもあるまいに。――僕はまだ細君のない牢人なんだから、君に今出て行かれると全く火の消えたやうだからね、これで細君でもあるなら、少々位君に不在を喰はされても大して差支ないが、今いふ通りの有樣だからね、どうぞ助けると思つてもう一度考へ直して與れないか、よ、賴む、こんなにして僕は賴む。」

私は兩手を合せて拜むだ、涙が頰を傳つて流れる。魂君はたまらず噴き出した。

「やあ、之れはひどいね、細君と僕魂君とを取り替へてもよいとの御託宣が、こりや一本參つたね、あはゝゝゝ。併し戲談は措いてそこまで僕を賴つて與れりや僕だつて強ひてとは言はない。じやお互に一つ奮發し合ふじやないか、惰ければお互に責め合ふとしよう。

「おい君、時に斯う談がうまく纏れば、明日が丁度我々の第廿八回の誕生日といふじやないか。之れを靈肉覺醒和合の新紀元として一大祝賀會を開き、大に運動と斷嶝とを奬勵しようじやないか、ね、君！。」

私は衷心からうれしかつたので、

「おゝそうしよう、そうしよう。時にね、明日は第二誕辰寄帖が出來上つて來るのださうだ。自心の誠を盡して書いて與れたので、いづれ愚かはないけれども、中に一つ破天荒な奴があつたよ、君も知つとるだらう。そらあの『先生の昔と今』といふのだよ題からしていかにも誕生日の祝書にふさはしいじやないか。」

「まつたくだ、あれ位の想があの諷書に活躍してるなんて珍とすべしだね。が、僕は思ふ。誰が果して今後『先生の今日と將來』てふ謎を解いて與れるだらうか。」

「あゝ一種の謎だね、大なる謎だ。じや、ほんとうに一つ協力して廿八歳の男を研き上げてやらうじやないか。」

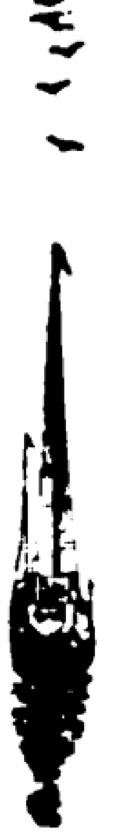
今まで闇にも著く現はれて居た私によく似た姿――我が魂――はふと消えた、紫の雲もどこへやら。

闇はます〳〵その闇黑の幕を描き出した。私の全身は汗びつしより、恰も重傷を負うた戰場の勇士のやうに。で、眼は閉ぢたまでは知つて居るが……。

（こ）お妹よ

孤舟

オー妹よ　寒さに耐む
我が妹　つれなかりしよ
夜深く　君が生命を
そのまゝに　世にも氣高く
皎々と　永久に輝やく
崇虔の　赤誠凝りし
貞心に　斷恨永く
胸を蔽ふ　許しませ君
我れおもふ　君が情けに
より深く　生命を犧牲に
捧げたる　神の御業に
酬ひでや　光榮ある使徒と
生きむ身の　生命の限り
世の果まで



春十句（第一週）

野も山も村も林も春霞
野も山も織り込まれたり春霞
野も村も眠れる如し春霞
春の野を銃聲やぶる練兵隊
練兵に踏み亂されし若菜かな
あはれかな春の野に出て練兵す
春の野に杖曳く男かはさびし
春雨の絲ほそく濃々淋しかな
紅一輪ゆたかに咲ける椿かな
後咲きの梅の一枝に月てりぬ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

半日遊記

晩菫生

三月七日、

この月に這入つてから、氣候が急に暖かくなり、殊に其の暖かい日が幾日も續いて來たものだから、けふなど窓を明けて見ると遠く兩山は霞に鎖されて模糊としてゐる風は無く、日も暖かで、坐ろに何物かにそゝられるやうな心地がして、遊心止み難く其處で弁當を濟ましてから、ステッキを持つて庵を出た。

まづ村の小學校に、女教師のR子を訪ねて見やうと決心した。けふは日曜だが若し暇かだつたら遊びに行きたいから、と前以つていつて遣つたら、是非入らしつてよと待つて呉れる事になつてゐるのだ。

私の所から小學校へ行くには、道が三筋あるのだ、が右と左とは、平地で平凡で、且つ度々通つてゐるので私の好奇心を引かない。其處で中の道を取る事とした。中の道は小山の頂きをのみ通つて行く間道で、柴刈る賤の男や、馬子やより外通はぬ、道なのだ。幾度か落葉を掻く、背負籠の大きいのを脊にした若い農夫に逢つた。

曲り羊腸の小徑を下つて上つて、稍々小高い丘上に出た時、私は東に向かつて、毅然と突つ立つて胸を張つて深い呼吸をした、遙かに安中、板鼻の町、土藏の白壁が午後の日を受けて爍々光つてゐる。碓氷川は其の間を縫つて縷々と東に流れて行く。其の先は霞に隔てられて、朦朧として見えない、靜かだ、長閑かだ、空に雲雀でも鳴いてさうに思はれたが、鳴いてはゐなかつた。私は急に天地悠久の感に堪えなくなつて、何んだか悲しいやうな、涙の出さうなやうな氣がして來たので、また歩き出した。

山道が盡きて坂を下つた所が、小山と小山との間の道の畔に、友人B君の家がある小さな破屋で、B君は小作農だ、豁かでない生計の裡に育つたのだが、B君はまた非常な學問嗜きで、私の通る時、暇かさうな庭に筵を敷いて、晝休みの日向ぼッこりをしながら讀書してた、無論野良着の草鞋穿きだ、私は剛健なるB君の如きが自覺して起たん事を望んで已まないのだ、がB君は自己の境遇に不平不滿が無いのだ、滔滔として漲り溢れて流れてゐる時代思潮の自由平等の空氣に觸れてゐないのだ、私は常に其の蒙を啓かうとしてるのだが、B君は俳諧を解しない、そして歌の發句のと戯れてゐる、然しB君が近來自己の貧賤を悲しみ嘆いてゐる、からして早晩醒める時が來るであらうと私は期待してる。

小學校に着いた、校庭から窓の硝子障子越しに、左側の事務室を見た。男教師のT君とK君とがゐてR子は見えない。私は稍々失望したが、一服しやうと思つて室に這入つた。するとK君が「城山に登らうちやないか、今補習の女生徒が登つたよ」といふ。私は夫れよりも逢いたい人がゐるのだが、氣後れがして其麽事もいへないで「ちや登らう」といつて、T、K兩君と、學校の裏から急坂を攀ぢて登つた。

城山の上には補習の女生徒が、四五十名一塊りになつて、わちこち摘し乍らぺちやくちや囀つてゐた私は彼れ等の風采擧止の余りに鄙びてるのを見て胸に悪感を覺えた、然して是れ等の野菊連が、我が村の花の粋なので、若い男等からちやほやされるのかと思つて、一人可笑しく思つた。

補習の女生徒は、H子、Y子の二女教師に率ゐられてゐるのだ。H子は私の妹なんだ。悲しい事情の爲に、終生獨身といふ決心で、東京のさる學校に裁縫を專攻して來て、今は村の小學校に專科訓導として勤めてゐるのだ。月給大枚十圓だ、そして朝は九時から夕べは四時までの長時間で、日曜さへ隔週にしか休めないのである。恐くて過ぎ、斯くて朽ちて、果たして何にを意味する生であらうぞ、私は常に彼の女を思ふてつくづく哀感に打たれるのである。

女生徒の間から、R子がひよつくり出て來て、「よく入らつしやいました」といつた私はこの人が此處にゐやうとは豫想しなかつた。嬉しさは胸に一杯溢ちたが素知らぬ顔してT、Kの二君と婦人の一團と別かれて山上をぶらぶらと逍遥し、思ふ樣四方の眺望を貪つた。R子は後に附いてゐた。

R子は質素な絣服の筒袖を着てる。女子師範の出身は皆これだが、私は「成る程女教師は先生なんつていはれるが、勞働者なんだな」と思つた。曾て私が或る雜誌で、小學教師も勞働者の一種だといつたら、何處やらの野暮天が、眞ッ赤になつて怒り出した事があつたつけが、純理の上からのみで無く、現に爰に我が友R子が私の前に勞働者然として立つてるちやないかと、私は腹の中でくすくす笑つた。

R子は色の淺黒い、眉の太い、眼の大きく鋭い、口の眞一文字に引き締まつてる、少し猫背の、柄の小さい婦人だ。時世相應の廂髪には結ふてゐるが、ハイカラでもなければ、また決して美しいといふ方の人でもない。が私は何んとなくこの人が嗜きでたまらないのだ。が、なぜ斯く嗜きなんだかは私自身にも分からぬ、蓋し嗜きなるが故に嗜きなんだらう。

其の中に補習の方の一同は下山した私共四人は猶ほ殘つてゐた。只茫然としてゐるのも手持ち無沙汰なので、枯れ枝を集めて火を焚き付けて見た。寒いといふ譯けではないがみんな手を翳して暖つた。开麽事しながら「この火でこの山が丸燒になつたら什麽だらう　懲役だらうな」と誰れやらがいふと「其麽位な事で懲役にやられるんなら、行つて見たいは」とR子がきつぱりいふ「とはいふもの、愈よくく遣られる段になるとめそめそ泣くんでせう」と私がいふと「何に泣くもんですか」と鋭い目を光らして乾としていつた　本當に其の勇氣がわるといゝがなと私は思つた。

枯れ枝を焚き乍ら、T君がいつた。「僕の近所の者なんか、薪が買へないのでみんな枯れ枝拾ひだ。枯れ枝拾ひが罪惡だなんつていつたからつて、薪が買へないんだもの仕方ないちやないか。」そうだ。罪惡だつて仕方ないんだ。

雜談數刻にして山を下りた。補習も最う放課になつてゐて、妹H子は慣れぬ手にオルガンを彈いてゐた。みんなして事務室で火鉢を圍んで放談した。R子はK君と教鞭で撃劍の眞似して、K君の横顔を「お面!」と撲つた。一座は哄笑した。

妹が菓子を奢る。茶が出る。私は飲んで食つて、烟草を吹かしてゐた。不圖した事から人格問題が持ち上がつたR子「が私は磯部さんを崇拜してます」といつた、磯部は私の姓だ。私はじつとR子を見詰めた、R子はこの時ばかりは下目に火鉢の火に見入つてゐて、しみじみした面持ちだつた。「若し本當なら面白いな」と私は思つた、世間が私の懷抱してる或る物を認めて、翕然として思慕して來る時に、即ちこの世は我れらの物だ。自ら輕じちやならぬと思つた。

懸かる間に日は暮ちる。ランプは點く、月は出る、皆別かれやうとの事に、私は妹と、Y子と三人して徐ろに歸路に就いた。月は雲間から麗顔を出だしてゐ、ぬくい風がそよそよと面を掠めて、何んともいへぬ快い心地だつた(三月十九日稿)

●新刊紹介

▲A Little Sister of the Poor (by Josephine Conger Kaneko)　本書は北米なる金子喜一氏夫人ヂョセフィン・コンガー氏の著で、夫人金子氏より寄せられたものである。著者は四年前米國社會黨の機關「[illegible]」の特派員として[illegible]に行つたことがあつた、此小冊子は即ち其研究の結果に成つたものである。著者は本書の序の中に、「若し二千年前の[illegible]が[illegible]一年間に於ける婦人[illegible]の爲に費さるゝといふ事實が明白となり、現在の制度が到底[illegible]であるが承認せられたなら、必ずや、其制度の廢止に向つて幾分歩を進むるであらう、若し此小さき物語に依し、母たる性が人類中最も[illegible]せられ卑下せられて居ると言ふその[illegible]を得たならば、若しこれに依て[illegible]といふ疑惑が起つたなら、若し之に依て、婦人の地位の改善を[illegible]に植付け得たならば、若し此書の婦人側に依る人類改革運動の小さき[illegible]たるを得たならば、本書の趣旨は達せられるのである、著者の希望も以上には無い」といふ、[illegible]に書かれたれば、日本の社會問題研究者には好個の伴侶たるべし(米價二十五仙)

▲社會主義と國家(樋口秀雄氏著)　是れ樋口龍峽君が近著「社會問題」中に載せられたる、論文を別冊と爲せしもの、由來社會主義の門外にある批評家として[illegible]著者は所謂社會主義に同情を有する一人であらう。殊に政府の社會主義に對する壓迫政策を攻撃[illegible]する邊りは頗る痛快である、けれども惜い事には社會主義の本質に就いての研究が足らぬ、從て其議論が徹底しない、力が無い。著者は共產主義の[illegible]として三箇の不便を指摘して居る、第一は勞働の自由の不可能、第二は報酬の權衡の不可能、第三は產物の[illegible]國家の不可能是れである。が、著者は何だか自己獨特の共產主義を作つてそれを自分で批評して居る樣に思はれる、恐らく八九十年以前の共產主義者には著者の言ふ如き共產主義を說いたものもあつたが、今では夫れは歷史上の一事實に過ぎぬ。著者は今日の自由共產主義に一度も出會はぬのだから、實は「共產主義」の[illegible]は少しくすぎるのだ。著者は「勞働者の生活は絶對に安全な保證せられん乎、……何人も困難なる勞働を避けて安全なる勞働を選ぶべく、爲に困難と危險との伴ふ職業に從事するものなきに至り、生產事業はその[illegible]を見るの止むなきに至るべし」といふて居るが之は社會主義を聞く者の最初の疑問である。[illegible]「困難」とは何んであるか、甲に困難なるも必ずしも乙に困難では無い、又危險の事業も同じで、甲が冒險を好まぬが故に必ずしも之を乙が嫌ふとは限らない、今の世にも自ら好んで冒險事業に進む者が多いでは無いか、のみならず來るべき社會は唯だ制度の革命ではない、人類の智識の新生である、道德の革命である、發明力の勃興である。今日の[illegible]も明日は意外に不易になるであらう。今日の危險は意外に安全になるであらう。機械力は極めて精巧に發達し勞働者の[illegible]を輕くし、人民は皆小時間ベストを盡して勞働し必要に應じて消費し以て裕富な愉快な生活を送るを得る樣になる此れ共產主義の理想だ、本書の[illegible]は僅かに[illegible]に足らないのであるから、[illegible]多くを望むとは出來ぬが、著者が眞面目にして熱誠あるとは甚だ嬉しく感じた。(旭山)(定價十五錢　本郷[illegible]日高有倫堂)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

福田女史に與へて婦人解放を論ず

無垢助

(一) 二十年來の敬慕

福田英子女史足下

予は未だ足下と一面識を得るに至らず、是れ予の久しきに渉れる遺憾なり。曾て忘るゝヿ能はざるの痛恨なり。然れども予が初めて足下の芳名を聞き足下を慕ひ初めて以來茲に二十年、予は曾て足下を忘れたると無し。足下の事業、足下の成敗、足下の風評、一として予の心識を痛く刺激せざるものはあらざりき。足下よ、予既に齢「不惑」を超え、頭髮霜を帶ぶるに至る然も足下よ憐みを垂れ給へ、予は足下の名を聞き、足下の風評に接する毎に、未だ曾て血湧き情熱するを禁ずるを得ざる也。姉よ、願くは予の狂熱を許せ、予の足下を敬慕して止まざるヿを怨むる勿れ。予は今ま敬慕の情禁ずる能はずして茲に拙き婦人解放論を玉案下に奉る。姉よ希くは予の愚衷を憐れみて予が爲に二三十分間を割愛して一讀の榮を賜へ。

(二) 自由民權

福田老姉よ。

予は姉が常に天下の憂に先つて憂ひ給ふを見て、私かに深く感謝し、自ら鞭撻して止ざる者なり。自由民權論の盛んなるや、姉は妙齢、其花の美を世に葯るべき時期にありながら、自ら身を挺して革命の急先鋒となり給へり。今日の徒らに華美を競ひて優柔軟弱なる女學生等の如きは當に姉の前に慚死すべき也。姉よ、予は更に姉が實業女學校を創立し給へる二十年以前を追想して今更に姉の先見を驚かざるを得ざる也。二十年前に於ける姉の事業は或は失敗に歸せしならん。然れども其失敗の罪は決して姉に存するに非ず、實に時代の罪たりし也。寧ろ唯だ姉の先見と姉の熱誠とを稱するに過ぎざる也。姉は人道に對する熱誠の止む能はずして女子の實業を盛にして以て女子の自立自由を實現せんと欲せしならんも、時代は遂に不幸にして姉に成功の花を與へざりし也。歴史上に於ける先驅たる人々が皆な形の上に不成功に終りしを見れば姉の運命は寧ろ甚だ光榮ある者と言可らずや。

(三) 世界婦人の雄姿

女子解放の急先鋒たる福田老姉よ。

予は實業女學校を二十年以前に計劃し給ひし姉が、再び自ら面目を新たにして世界婦人紙上に婦人解放を叫呼するの雄姿を發見して眞に欣歎を禁ずる能はざりき。姉か個人的教育事業より進みて、社會的改革運動に趣き給へるは確かに婦人解放の手段に一進歩を加へたるものと言ふべし。然れども姉よ、深く姉を敬慕する予の爲に暫らく予の疑問を許せ。予は惧る、今日の難關に逢着して増々熱誠を奮さんとする姉に對して其趣旨を疑ふ如きは如何にも冷酷無情なるに似たるヿを。然れども姉よ予は衷心より深く姉を敬愛するが故に、却て予の疑惑を自ら葬るに忍びざる也。希くは婦人解放問題に關して男子たる予の誠の感想を聞き給ひて、晩餐の調理に用ふる一七の糧となし給へ。

(四) 女子果して弱者なるか

敬愛する福田老姉よ。

予、熟々考ふるに、世人一般に男子を强者となし、女子を弱者として、ともすれば女子にさへ同情すれば我面目立つとなす如く見ゆるは是れ聊か理由に乏しくは非ざるか。姉よ何故に女子は男よりも弱者なるや、女子獨り解放を要して男子に要せざるや、何故に女子のみ獨り二重奴隷なりと言ふべきや、貴姉が世界婦人紙上に於て常に主張し給ふ所によれば、女子は、男子と共に經濟上の束縛を受くると共に別に男子に對して奴隷的の地位にありと言ふ。然れども姉よ、女子が多くの場合に於て男子の下風に立ち男子の壓迫を受くると同時に、男子も亦た重大なる場合に於て女子の膝下に布かれ、女子の制肘を受くるヿ甚だ多き也。否男子が互に相對する場合に於ては、予は實驗す、女子の權威が男子の其れに比して何時も甚だ強大なるヿを。

(五) 男三郎、伊藤公、草平

姉よ、希くは二三の實例を擧げしめよ、姉よ、明治裁判史上に一の異彩を放ちたるもの、而して昨年市ケ谷獄裡に於て絞殺臺上の露と消えたる、可憐兒野口男三郎は如何なる教訓を遺せしや。男三郎が一旦かの絶世の佳人曾惠子と相許すに至りてや、春の花、秋の菓、夏の緑葉、冬の雪、ありとし有らゆる物は、皆な曾惠子の爲にあらざるは無きに至りぬ。曾惠子は男三郎に對して絶對權者となりぬ。曾惠子の一嚬一咲は以て男三郎を活殺するの威力を有するに至りぬ。然り、男三郎は曾惠子の爲に實に其春秋多き生涯を捧げたりし也。然も男三郎は曾惠子の爲に死して、曾惠子は尙獨り生く。曾惠子の生くるは素より無情なるに非ずと雖も男三郎の死は憫むべきの極なり。

夫れ男三郎の如きは最も極端なる實例なり。若し單に男子が女子の爲に驅使せらるゝの事實に至つては、天下至る所に比々として存すべし。否な、具さに驗し來れば天下の事大抵皆な女子の爲に行はるゝ者に非ざるは無し。曾伊藤公は婦人の問題にて宰相の職をすら棄てたりき。近くは出齒龜の如き、電小僧の如き、森田草平の如き、歸する所は皆婦人の犧牲となれる者に非ざる無きか。男子が學問して大人物たらんとするも、富巨萬を得て大富豪たらんとするも、議員となりて大雄辯を揮ふも、閣臣となりて經綸を行ふも、皆な婦人を得んが爲なり。婦人に愛せられんが爲なり。賄賂を取るも、節操を賣るも、勉むるも怠けるも、畢竟亦た其源を同じうすと言ふべき也。されば姉よ、國も社會も、家も個人も、墮落するも、向上するも、皆是れ世の婦人の一顰一笑より來れるに非さらんや。

(六) 予の婦人觀

婦人解放に熱心なる福田老姉よ。

予をして、少しく婦人觀を語らしめよ。

予敢て婦人を憎惡する者に非ず、否、婦人を愛する上に於て予は決して人後に落つるものに非ず。然れども今日の婦人は如何にしても愛らしき點を發見するヿ能はざる也。彼は抑壓する時は忽ちにヒガムなり。放任する時は忽ちにツケ揚るなり、離るれば恨み親しめば亂るなり、然も決して命懸けに男子を愛せず、常に利害を打算し、前後左右を較量し、イザ最後の覺悟と言ふ場合には何時も男子を前に突出して己れは後に身を退くる也。男子は時に腕力を以て女子を虐待すれども、女子は常に心情を以て男子を虐待する也。男子に無理心中を要求する者あれども、男子に無く、女子に鐵砒礦を發する者あれども、男子に無し。女子に噬臍を食いたる男子は、男三郎の如く犧牲となりし者に比して其憐れさ幾倍ぞや。

(七) 女子の跳梁

福田英女子史足下。

婦人が心情を以て男子を虐待する事前述の如し。男子は腕力の强きが故に時に之を亂用し、女子は腕力弱きが故に消極的に男子を虐待す。然れども男子の腕力亂用が稚氣愛すべきもののあるに比して、女子が冷酷奸邪なる態度を見ては戰かざらんと欲するも能はざる也。刑法上其他の法律上習慣上に於て女子を比較的下位に置ける今日に於てすら尙且以上の如し。若し進んで此等の差別を撤去せんか、天下の女子は如何に跳梁を逞ふすべきか、之を想像して予は寧ろ戰慄せざるを得ざる也。然れども之れ唯だ劣惡なる今日の女子を標準として論ずるに過ぎず。男女の法律的差別を不條理なりと信ずる予が如上の差別を撤去せんことを贊するは素より然りと雖ども、女子が解放後に奔らざるや否やは暫く疑問たらざるを得ず。

(八) 經濟的解放

福田老姉よ。

予は深く老姉の寛容を謝す。淺學菲才なる予の拙劣なる文字に一瞥を與へ給ふことを感謝す。姉よ、希くは最後に尙は一言を吐かしめよ。予は男子に對する女子の特殊なる解放といふことあるを甚だ疑ふ者なり。然れども男子と共に女子をも解放すべき、所謂經濟的解放てふことは吾儕も決して之を非認する者に非ず。否な、之が爲に自ら意を盡し誠を盡して努めんとは日夜私かに念じて止まざる所なり。姉よ尙は一言することを予に許せ。姉よ予は繰返して言ふ、女子は決して弱者に非ずと。男は男をも生む能はずと雖ども、女は男をも女をも產むヿを得る也。此點より見れば女は世界の王者なり。男は女をして此大業を完成せしめんが爲の付從者たるに過ぎず。太古の社會は母を中心として組織せられし時代ありと聞きけるが、疑ふべくもあらざる也。嗚呼、かく觀じ來りて、予は婦人の將來の爲に祝福すると同時に、男子の將來を慮ふて暗澹たらざるを得ざる也。さるにても先見の明ある福田老姉よ、二十年來全心全靈を以て慕ひ來れる福田老姉よ、姉は實に、予が戰慄しつゝある將來の婦人に對して先覺者たる也。嗚呼予は其戰慄の問題を轉じて老姉に及ぶや、恰も春の氷の陽光に溶くるが如く、忽ちにして和融に歸する也。是れ男子の身を以て怖ろしき將來を有する婦人の身なる老姉の前に此一篇を呈せし所以なり。敬愛する福田英子女史足下、希くは予が爲に一讀の勞を吝むヿ勿れ。妄言多罪

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

空裡光（七）

進化と革命

南紀百南無十讀人

「嗚呼今之人、雖レ謂三僕爲二病狂喪心之人一、亦無二不可一矣、天下之人心皆吾之心也、天下之人、猶有二病狂者一矣、吾安得而非レ病レ狂乎、猶有二喪心者一矣、吾安得而非レ喪レ心乎」──王陽明

「新しき布を以て舊き衣を補ふ者はあらじ、然はつくろふ所のもの反て之を破り其の綻び最も甚だしからん。また新しき酒を舊き革嚢に盛る者はあらじ、若しかせば嚢はりさけ酒もれいで、又嚢も亦敗らん、新らしき酒は新しき嚢に盛るべし、然らば兩ながら存べし」馬太九の十六七

過去は永久に追ふ可らず、未來は永久に達す可らず、吾等は現在脚下に於て安心を得なければならぬことは元より當然である。

然るに吾等は際限無き時間の流に浮びたる一個體であるが故に、吾等自身の靜止は即ち之を他より見れば急速なる轉進である。例へば船に乗れる人の身は靜止するに係らず、他より之を見れば急流に從つて轉下しつゝあるが如きものである。靜中有動、動中有靜とは此の如き場合を言ふのであらう吾等の安住は實に此急流中に存するのである。而して此急流の一形式は即ち之を「進化と」言ふ。

然るに吾等が此無限なる時間の大流中に於ける自己を見る時は、其生命の短きこと電光の如く、石火の如きものである。眞にはかなき露の生命である。然るに又一たび内に反りて自巳の心靈の己み難き喘ぎを了解する時は、今まで自己の生命の短かきをはかなみたるも、畢竟此心靈が無窮の生命なる爲めなりしことが分る、而して斯く自覺して後、社會進化の上に於ける自己の地位を考ふる時、此に革命の渇望が起る故に革命とは突飛的進化なりといふことが出來る。予は、梟鴨獄裡に在るの日、社會の友に送れる文中に此革命に關して次の如く記した。

古語に曰く、「苟日新、又日新」と。時は革命なり、天地萬物は時々に革命す、春雨秋風は革命なり、夏熱冬寒は革命なり、生は革命なり、死も亦革命なり、人の一生は革命なり、物の一代は革命なり、時々に破壞して長へに生きよ破壞は永生の反面なり、破壞を避くるものに墮落あり、破壞を怖るゝものに腐敗あり、破壞に進むものに希望あり、一瞬も止まる可らず、一步も退く可らず、常に英氣を全身に充てゝ猪進すべし、斷々乎として左右を顧みる勿れ。

人生の存續する限り、人生の進化は絶滅せぬであらう、吾等、此進化を意識して自ら進んで之に投ぜんとする時、此に革命の叫びが起るのである然るに今日、此進化を意識して革命を鼓吹する者に二派の別がある一は進化の動的觀察を爲して之を革命の標準とするもの、是である。換言すれば歷史的轉遷の事實に徵して之を今後の革命に推及せんとする歷史派是である。他は進化の靜的觀察に基きて革命の標準を樹てんとする者換言すれば、歷史各時代に亙りて一貫せる理想的事實に據りて革命の標準を樹てんとする理想派とも稱すべき者是である。前者は階級戰爭論を主張するマルクスの如き處にして後者は相互補助論を唱導するクロポトキンの如き是れである而して長き歷史の階段的變遷を見て以て、現實社會も亦其一階段なりとする社會民主々義者が現實の改良政策に接近したのは、素より當然の結果である。之と同一轍で、理想に憧憬する無政府共產主義者が全然現實を否定して動もすれば理想鄕の建設に趨くの傾向あるは亦自然の勢と言ふべきである。

然らば此兩者は何れを可とすべきか、予の考では、此兩者は何れを可、何れを否と決すべきもので無い。兩者は共に社會改革思想の兩面であると思ふ。歷史の變遷には階段がある。如何なる立派な理想と雖も團子を丸める様に容易く之を實現することは出來ぬ。と言ふて理想に對する憧憬の心が無くては革命の熱心は起らぬ、此兩思想がある爲に革新運動が能く現實社會の中に進んで行くのである、永き〳〵戰鬪を持續する事が出來るのである。乍併、人間の性癖趣味は妙に人の實際生活の上に大勢力を持つて居るもので、此性癖趣味の相違によりて歷史派と理想派といふ様な二派が出來る而して此に二派が出來ると、互に他を排斥しやうとして知らず識らず無理な理窟をコネる様になる、かくて純理の上から言へば衝突する必要も無い様に見ゆる議論も實際上に於ては火花を散して戰ふと云ふ様な奇觀を呈する。乍併是れも、人生努力の經路に現はるゝ自然の一事實であれば、己を得ない殊に實際上の改革運動に於ては一個の方便として必要なる場合もある。斯く觀じ來れば其爭論の火花にも頗る妙味を添へ來りて人生の進路を飾るのである。實に世界進化の上より見れば、是れ所謂「無影樹下同船」で互ひに爭ひつゝも一筋の流れに船を同じうして浮んで居るのである。

夫れ人生の進化は日に新たである。之を自覺したる心靈は實に耶蘇の所謂「新き酒」である。既に此新き酒有るあり舊き嚢たる制度習慣を破壞すべきは、眞に當然の事理である。見よ、天下の人は此社會變遷の急潮に流されて狂亂して居るでは無いか、自殺の他殺の、詐欺の、強盜の爭鬪の厭世の、其は〳〵今の社會の實狀を見れば實に眼も當てられない程の慘憺を演して居る「嗚呼今之人、雖レ謂三僕爲二病狂喪心之人一、亦無二不可一矣である。「吾安得而非レ病レ狂乎」

春雨集

嘯月

○南國堂朱の落ちたる御柱に小さき名を彫る春雨する日

○戀も無く名も無く果てし若き日のその寂しみを知りますや君

○政壇に立ちて説く若人を寂しと見たり春潮つる日

○額を壺に埋めて物乞ひぬこれをし神が賜るといふや

○詩よまば人惑はむと思ふ子は裂きて捨てまし芥の中に

○漂浪の十歳は過ぎぬ若うして人に捕はれたり世にもすねたり

○春雨や初瀬は雛の里にして善男善女小傘して詣く

○亂行の形見となりし盲の子白き齒をかみ父を呪ひぬ

○紅梅を一片封じまゐらせむ醜のありとな思し給ひそ

○裸形して君の御髪を攫かみて浮ぶと夢む住の江の浦

編輯局より（石川生）

△二月號が景山梅子女史の紀念號となつて特別に印刷費なぞが多く懸かつた爲め、三月號は八頁として少しばかり印刷費を倹約致し、讀者諸君へは申譯無いことを致しました、併し費用が嵩まる、百五圓といふ罰金は取られると言ふ時節なれば、ドウぞ御宥恕を願ひ上げます。

△石川生出獄以來、大に本紙にも改良を加へたいとは思ふて居りましたが、故郷の家政上の問題やら、西洋社會主義史の編成やらで、遂に心を本紙に專らにすることが出來ず間に合せの編輯を續け來りしと幾重にも御詫申上ます、是れからは多少時間に餘裕も出來ます故、出來るだけ紙面の改革に勉めたいと思ひます。

△然るに此頃の政府の警戒は從來夢想だもせざりし程嚴重となり、加ふるに學術雜誌の事なれば、到底思ふことは書けませんが、今後は可成研究的に、廣く材料を集めたいと思ふて居ます。別項にも廣告してある通り、讀者諸君より盛に増して研究的原稿を御寄贈下さる様に願上ます。

△此頃知人より世界婦人に關する警告を受けました。其は世界婦人が要領を得ないと言ふ事でありました。乍併世の中に此要領を得ぬといふ言葉ほど要領を得難い詞はありません。要領を得ぬとは何ういふ事でしやうか、警告の意は多分主義が鮮明で無いといふに歸しましやう。併し世界婦人の要領は「婦人解放」といふ事以外には何もありません。そして既に解放を主とする以上は「何主義」といふ如きものに囚はれてならぬとは勿論であります。世界婦人は婦人解放の爲めには如何なる主義も如何なる教理をも利用する覺悟であります。世界婦人は「人」を解放せんとする者にして「主義」を樹立せんとする者ではありません。

△尚は申上げます、世界婦人は財政が餘り豊かでありません。從て讀者に趣味を與へ紙面に光彩を添へる寫眞版或は木版等を多く掲載することが出來ないのは殘念です。併し今後は傳記などには可成肖像を添へる様に致したいと思ひます。

△最後に尚は一言致します。罰金の事であります。前に申す通り、財政困難の實情を御了解下されし以上は、ドウぞ「罰金引」といふ封紙の押印に御注意なされて、可成御急ぎ御送金之程願上ます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小說　**脫殼**

帆雨

三月半頃の寒い朝であつた、僕は褥を出て窓の戸を明けて見た、寒風が酷く寒いのと前夜の宴會で聊の疲勞を覺えたのとで、再び夜具の中へ潜り込んだ。そして枕元の机の横に首を出して新聞を讀み初めた。スルと窓の下に優しい女の聲がする。

「花岡さん！花岡さん！」

僕は「秋庭菊代君の樣だが、ハテナ……」と考へながら。

「ヘイ」

と答へて障子を明けて見た。果して菊代君であつた、昨夜課長の宅の宴會で、深く僕の話に感じ入つて、歸途もワザ〳〵廻り道をして近所まで一緒に來た菊代君であつた

「大ぞう早く、何んですか？マア入つしやいな、表から廻つて……」

僕の居る家は二階が六疊で下が六疊に三疊總て三間の長屋で通りからは一番奥になつて居る。主人は六十近いお婆さんだ。僕は其二階の六疊を占領して居る。此長家の垣を隔てゝ廣々とした原がある。菊代君は今其原から僕を呼んだのだ。

「お差支はありませんの？」

馴れ〳〵しく菊代君は問ふた、小首を少し傾けて、僕を凝視た。眼は殊に輝いた。

「え、決して……」

僕は嬉しい樣な心地がした、菊代君は小走りに表通の方へ廻た。寢衣の寢卷一枚の僕は、冷くなつた體を再び褥の中に押込んだ「起きなくちやア失禮だが、アンな氣さくな人だから宜かろう」と。僕は獨で合點して重い頭を枕に載せた。

「御免下さい」

と共に下の格子戸の明く音がした。

「サアどうぞ此方から御上り下さいまし」

のお婆さんの聲であつた。ギチ〳〵と鳴る梯子段を靜かに上て來たのは菊代君である。

「お寢みの邪魔をして失禮しましたわね」

あづき色の毛糸の襟卷を片手に持つて、コートの紐を片手で解きながら、挨拶であつた。

「イヽえ、僕こそ失敬です、起きもせんで」

寢返りをして、仰向が腑向となり、枕元の机の下の座蒲團を出して、

「ドウぞ敷いて下さい、私、少し風を引いた樣でね、それに、此月になつて、今日初めて悠くり休めるのだと思へば、床離れが死ぬ程イヤなんです、ドウも失禮、醒きに起きますよ」

菊代君はコートを脱いで、輕く靜かに一禮して、僕が出した座蒲團に座つた。

「ホンとに無遠慮ですわねえ、男一人の所なぞえ……、昨晩から何うしたのか……今朝もモウ宿に靜止して居られないものですから出て來ましたの」

「ドウしたと言ふのです。」

「自分でも分らないの……唯だ貴方に聞て戴きたいことがあるの……」

菊代君は昨晩歸途から深く心に悶えを起した樣であつたが、今朝も其爲にコンナに早く來たのであろうか。

「貴方にも似合ない……、十九や廿歳のオボコぢやあるまいし、何なりと判然と言ふて下さい」

菊代君は僕の枕元に擦寄つて、僕の顏を凝視めながら、思切つた樣子で。

「私、貴方に懺悔したいことがあるの」

僕は昨夜歸途から、菊代君の素振が少し變だと思つたが、今此語を聞くに至つて、又其瞳の輝くのを視るに至つて、判然と覺ることが出來た菊代君は僕をラブし初めたのだ併し僕は左程に心を動さない。僕は既に戀の殻である、僕が互に手を握り、唇を接した、天上天下唯一人の愛人は、既に其氣高い美しいエンゼルの如き姿を此世から葬り去つたのである。僕の戀も亦之と共に葬られたのである。菊代君も殆んど同樣の境遇に居る。菊代君は姓を秋庭と呼んで居るが、之は法律上の姓では無い。秋庭といふのは彼女の情人の姓である。秋庭は北海道の富豪の子で未だ大學の學生で居た頃に菊代と相許すの仲になり、一年餘りも夫婦の如く同棲したのである、それが父に強斷されて、伯父なる宮内省高官の娘と婚し、剩へ菊代とも談り合ひ、親友とも約した社會改革の志望を枉けて毎日宮内省に通勤して而も快々と暮して居る。菊代は一時情人の意氣地無さを憤慨もしたが、今では却つて其の不幸を憐れんで居る。そして其の姓まで自ら「秋庭」と呼んで、自分は何處までも秋庭の妻だと言つて居る。之を知つて居る僕は、今ま菊代君の情を察するとか出來ても、餘り有難くは感じられない。然し滿更憎いとも思はない。

「懺悔つて何か惡い事をしたのですか？」

「思ひ切つて言ひ、まア貴方は可笑しく思ひなさるでしやうねえ」

流石に少しく恥らう風情である、頬の邊は紅を潮えて、ポッと上氣した樣が見える。が、格別に惱した樣でも無く、出版會社に入つて以來、六ケ月間の經過を談るのである。菊代は秋庭の友人で此會社の販賣課長をして居る橋本といふ男の紹介で此處に來ることとなつた、入社してからも橋本の配下に勤めて居る。此橋本といふ男、仲々の才子である。所謂る敏腕家である。株主に受けが善い。重役を勤める。會社の中を搔廻はす。併し俗惡極まる奴だ。其俗惡の根性で屢々雜誌編輯などに就て嘴を容れる何時も衝突するのは僕だ。編輯局員は皆彼を惡んでは居るが、彼と衝突しては頤が干上るといふので、堪えて居る。ソコで比較的に月給の少ない、體累を持たない僕は、諸子を代表して彼と爭ふ。平生極めて無口な僕が、彼に對すると能く議論を始めるのでそ橋本の僕を厭ふと蛇蝎の如くであつた。そして陰では僕の事を、變物だ、奸物だの鈍物だのと罵つて居る。菊代は始終之を聞かされた菊代は橋本が自分の世話をして呉れるのは宜いが、恩を鼻に掛けて頻りに言ひ寄るので、橋本の言ふとは素より虫が好かぬが。併し僕の神經質な顏容を見て、成程ソうかとも思つた。そして僅かの月給に甘んじて、アのみすぼらしい姿をして、必ど意氣地無に違いないと思つて居た。處が昨晩の宴會に、僕が課長其他重役連の前で商業と人道との衝突から、株主と下級社員殊に印刷部の職工との利害の衝突、之を未然に防ぐのは重役諸君の責任なると等を熱心に述べたので、菊代君は深く感じ入つた。そして橋本がイヤな顏をするにも係はらず一所に其處を辭して出た、歸り道も互の身の上を談り、僕が戀の敗北者たるとを知つて、始めて僕の神經質の容貌を讀むとが出來た、そして急に僕に對する同情の念を深くした。戀に敗れた人にして初めて眞に失戀者に同情することが出來ると言ふた僕の言葉が電氣の通つた樣に菊代君の全身に響いた。菊代は此事を談り來つて俯いて脣を震はして居る。

「秋庭と別れてから、昨晩初めて復活の洗禮を受けた樣な氣が付きましたの……」

菊代君の顏は輝いて來た。胸には焔が燃え立つて居るのだ。僕は之を見て心が動かぬでも無い。いぢらしく可愛くも思はれる。ケレど僕の心は死んだ靜江が守つて居る。が併し妙だ、靜江は頻りに菊代君に同情して居る樣に思はれる。菊代君も亦言ふ、

「貴方が戀の脫殻になつて居らッしやるのは私承知して居ますわ、たゞ其貴方の心意氣が私や妙に嬉しいの！」

僕の胸にも波が打つて來た。ケレど底の心はヤハリ洋々として靜かである

「貴女は秋庭と云ふ名に封じられた身の上ぢや無いですか」

「ソリヤ固より秋庭が可愛いのは當然です、ケレど其は唯だ私の心中にあるだけで何の反應あるでは無し、トいふて他の人を戀するといふ資格は無し、其ならばといふて趣味も無い、理想も無い、肉ばかりの男は厭だし……」

菊代君は漸く口籠るのである。

「丁度私が手頃な玩具だといふのですか」

見れば菊代君の眼には淚が一ぱい溢えて居る。

「酷いわねえ、私にばかり喋らせて……揚足なぞ取つて……」

僕はムラ〳〵と血が湧いて來て、自分ながら不安になつた。起き上ろうとして兩手を夜衣の外に延した。

「アラ、モッと寢て入つしやいよ。」

菊代君は僕の手を取て夜衣の中に押入て、

「御免なさい、私の手は冷たいでせう!?」

僕は其手を握り返した。顏の熱にも似ず、其手は氷の樣に冷たいのである。

「オ、冷たい、こうして溫めましやうね！」

僕は其手を腋下に引き入んだ。菊代君は格別驚きもしない。差程拒みもしない。唯だ其胸の鼓動は烈しくなつた樣だ。其熱い呼吸は僕の額に突いて來る。遂にはウツとりして僕の夜衣に凭り掛つた。

「ホンとに私、何といふ亂行者でしやう！

貴方呆れなすつて？」

菊代君の眼は憐みを乞ふ者の如く輝いた。

「イヽえ」

「ケレど私、どうしても秋庭の事は忘られはしませんの、貴方も、亡なつた方を何時までも戀して上て下さいね」（三面に續く）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

喜劇　伯父か甥か（二）

第四場　シルレル作　神崎沈鐘譯

武夫、森太、春子

春子「おや、お歸りで御ざいますか」

武夫「ハイ、お歸りとは何のことだ」

春子「おホヽヽ、妾共をビックリさせうと思召して、お手紙には早くて一ヶ月位かゝると有仰つて、まだ四日しかならないのに」

武夫「私が何日手紙を出した、誰れに」

春子「おや、伯母様に（森太の方を見て外套を開け）淺間様は何處に被居ます」

武夫「淺間とは——誰れだ」

春子「菊江さんの新郎、あなたの未來の婿君」

武夫「お前は何を喰違つてゐるんだ、私を誰れだと思つて居るんか」

春子「おホヽヽ、可笑しいこと伯父様は」

武夫「こりや面白い　妹までが間違へて居ら」

春子「妹まで、——ぢやあなたは兄様なの」

武夫「さうサ、——兄の富士武夫だ」

春子「でも何だか變だわ、兄様は横須賀の聯隊附ですもの、而して第一髭もないし、服だつて異つて居ますわ」

武夫「春さん、實はね、不圖したことから聯隊の中佐と決闘して、衛戍の目を逃れんがために髭を剃つて、伯父様の外套を着て居るのよ」

春子「あらマア、やつぱり兄様、——妾伯父様だとばかり思つて居てよ、おホヽヽ、好く似て被居るわ」

武夫「伯父様はお留守」

春子「えゝ、結婚のことで」

武夫「結婚——そりや誰の結婚で」

春子「菊江さんの」

武夫「何ッ——菊江さん——菊江さんが結婚するつて」

春子「さうなの——兄様は知らなくつて——

武夫「ちつとも聞かない——あゝ畜生どうして呉れる」

森太（近寄りつゝ、一言を承りません」

春子「さう——ではお話しませう、淺間様はね、伯父様の舊いお友人で、今名古屋の師團に居なさるの、其の方の息子の要様と菊江さんと結婚をなさるのですつて、妾共はまだお目に懸つたことはありませんが、何でも人の評判では、好男子で非常に愛嬌のある、優しい方ださうですよ、それで伯父様がお迎ひにお出になつたの、相談なさるのかどうかは、能く存じませんが、一ヶ月の後には一緒に上京なさるから、あなたも其れまで御逗留なさい、祝言の舞踏を一緒に踊りませう」

武夫「あゝ——春さん大變なことになつた、戰争だ、援助て呉れなくちや、何か旨い工夫はないか知ら、お前たち二人が助けて呉れなけりや俺やもう華厳の瀧でも行く

春子「嫌な兄様は、華厳だなんて、何うなさつたの」

森太「お嬢様——旦那様はね、お嬢様——菊江嬢様に夢中になつて被居るので御ざいます」

春子「おホヽヽ、兄様が——菊江様に」

武夫「さうだよ、此の憎い結婚を成功させてたまるものか、生命を捨てても菊江様を此方のものにしなくちや、あゝ旨い工夫はないか」

春子「困つた事になつた、大變だ、今更結婚を中止すると云つても、兩方の親々が堅く約束したことだし　何も彼も準備して唯だ婿様の上京を待つて居ると云ふ仕末なんだが、マアどうしたら宜からうか」

森太「何にさう御心配なさるには及びますまい、私に可い考が御ざいます（兩人の間に近寄りながら）」

武夫「何に——旨い策がある——ちや疾く云へ——疾く」

森太「どうせ伯父様に化たのですから、旦那何處までも其まで押し通しなさい」

春子「マサカ親子で結婚する譯にも行まいに、隨分滑稽だわ」

森太「夫れはそれに違い御ざいませんが、其處に其の、私の策略があるので御ざいます——旦那は伯父様の役を力める以上は一家の主人で御ざいませう其の主人が此の結婚を破談にするのは、主人の權力で何にでもなります、淺間要が急病で死んだと云ふことにして　彼此する中に旦那が菊江嬢様と結婚したいと云ふ手紙を書いて伯母様に送る　其所で私の呼吸で其の手紙を持つて行く使者に私がなる、すると伯母様は甥たる旦那を非常に可愛がつて被居るから心中此の申込みをお聞き下さるに違いない、そしたら急用があるから菊江の結婚は萬事お前に委すと被仰つて旅行する眞似をして家をお出なさい、而して翌日髭を脱き、聯隊の服を着て、横須賀から上京した風で大佐家を訪ひ、大急ぎで菊江嬢様と結婚して仕舞へば大丈夫　伯父様が婿様を連れて歸つて被入つても、國へ返すか、名古屋か京都邊に婿を探しに行かしなくては何うすることも出來ないでせう、何と旨い計略ぢや御ざいませんか（手を拍つて）一人で喜ぶ」

武夫「それは更に旨いが伯父様が默つて居るだらうか」

森太「そりや憤りますとも、烈しくお憤りになるでせう、けれども伯父様から見れば旦那様は甥、菊江嬢様は娘ですもの結婚した後で何と被仰ても仕方がない、困つた奴だ位で、笑つてお赦し下さるでせう」

春子「そんな隱謀みしたらきつと私が叱られるに違いないわ」

森太「さう御心配なさらなくも、案外産むが易いものです」

武夫「實に旨い計略だ、然し實行が出來るかどうか、伯母様が伯父様だと信じて仕舞へば可いが危いものだ」

春子「妾だつて伯父様とばかり思ふて居たんですもの　伯母様だつてきつと思ふわ」

武夫「最初は兎も角、後に——」

春子「ですから、伯父様に悟られない間にお早く急いで片付けなくちや不可ないわ、サア今晩の中に　丁度好く灯火も薄暗いから早くなさい、而して森太が云ふやうに今晩直ぐ急用があると仰つて家を出ないとマヅイわ、明日は眞の兄様になつて、態々横須賀から上京した體をして被入い、さうすれば一も二もなく成功よ、あゝ疾くお急ぎで伯母様への手紙を書いて森太に渡しておきなさいよ」

武夫「机の方へ行きつゝ）春さん　春さん何でもお前の好な物をお禮するよ」

森太「手を擦りながら）旨い、實に旨い、自分の計略でお氣の毒だが、菊江嬢様は此方の者だ——面白い——全くだ」

春子「何たよ森太、何が面白いの」

森太「面白いぢや御ざいませんか、戰爭するのは旦那が上手かも知りませんが、此んな智慧はヤッパリ——マア御覧なさい、淺間様の鼻の穴を開けさせてあげますから、エヘン他人に出來る狂言でない、仕舞ひまで御覧なさい、きつと此の結婚に花を咲かせて御覧に入れますから」

春子「でも——菊江さんは」

武夫「（手紙を封じて森太に渡しつゝ）ソレ手紙は貴様の望み通りに出來た、旨くやつて呉れ」

森太「ヘエ大丈夫、能く呑み込んでゐます　旦那御満足で——私が横須賀から來た風をして、鞋を穿き汗を流して飛んで參ります——旦那流に、大膽に、[illegible]を旨くやつて、伯母様を誤魔化して伯父様だと思はせ菊江様と御結婚なさつたら、財産も少しは貰へるでせうか、其の時は此の忠義な参謀にも少しは御禮を願ひます」森太　去る）

春子「サア兄様、伯母様が此方に被入るよ　確りおやんなさい、きつと伯父様だと思ふて居ますよ、而してね伯母様と話をなさる時は妾に彼方に行けと被仰つて下さいさうでないと都合が悪いから」

武夫「一體何と云ふて話をすれば可いのか」

春子「それわね、良人が妻君に向つて話すやうな口調で話せば可いのよ、恐れて居ては駄目よ、サア早く……」（つゞく）

寄稿を歡迎す

▲論文　社會問題、婦人問題、家庭問題、育兒研究（社會主義的見地に[illegible]せる者）等いづれも學術研究的なるを歡迎す

▲序事文、序情文　いづれも斬新にして自由思想の熾んなるを歡迎す、餘り長からざるを好む

▲長詩　短歌　愛情若くは熱情の烈々たるもの、悲愁若くは哀傷の切々たるもの　而して可成平民的なるを歡迎す。

右寄稿者諸君はなるべく十九字詰の原稿紙に御記入下さる樣願上ます、併し　原稿取捨の自由は之を編輯者に付し置かれたく、此義は豫め御斷り申ます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

動物の相互扶助(一)

クロポトキン著
石川三四郎譯

(一)生存競爭

進化の一要素としての生存競爭の思想は、ダーヰン及びワレースが、之を科學の上に結び付けた所のものであるが、此思想は、僅か一時代の間に、吾人をして此觀念を押擴げて現象界無限の境域を包容せしむるに至た、嘗て吾人の哲學上、生物學上、社會學上の思索の基礎となつた、有機物の機能及び構造が其周圍に應合する作用、生理的及び解剖學的進化、智識の進步及び道德の開發(嘗て吾人が頗る雜多なる理由を以て說明せる)等、複雜無數の事實をも、ダーヰンは之を此單一の普通觀念に包容した。吾人は之を以て、生命の充足、變化及び力能等を最極に達せしむる樣な個人、種屬、種類及び社會の發展を目的とする不斷の努力——反對なる周圍に對する競爭——なりと解した。最初には、ダーヰンも、此要素の普通性に就きて充分に會得しなかつた樣である、蓋し彼が最初の志願は、之を以て單に個體各個に現はれし變化を集積して、其階級劇烈に證明的順序を付するにあつた。されど彼は自ら科學に結び付けた生存競爭てふ文字にして、若し單に偏狹なる意義(狹隘なる生存の目的の爲にする個生間の競爭の意義)に用ゐられたか其哲學的意義、其唯一の眞義を喪失するに至るべきとを豫見した。彼は其名著『種の起原』の冒頭に於て『一が他に賴るの事實を含む所の、又、個生の生活のみならず子々孫々と繼續する生活をも含む所の、廣大無邊なる意味』を以て此文字を說明した。而も彼自身、或特殊なる目的に對して此文字を用ふる場合には、多くは狹隘なる意義を以てし、其門弟に對しても、其狹義を過重するの誤謬(而し一所は彼自ら之を敢てせり)に陷らざらんことを警告した。『人の由來』中に於て、彼は其本來の廣き意義を說明する爲に多大の頁を費して。彼は、無數の動物社會に於て、生存の爲にする各個生間の爭鬪が如何に消滅するかを示し、爭鬪が如何に『協心協力』を以て行はるゝかを示し、而して其結果、却て智識的及び道德的能力の開發を來すことを示した。蓋し其能力は其種族に永存の最好資格を保證するのである。彼は詳說して曰く、此かる場合の適者は、肉體的最強者で無ければ、又た最狡猾者でも無くて、其團體の幸福の爲に强弱共に互に相助け相聯結せんことを勉むる者であると。又、彼は記し曰く『最も同情に富める團員の最大數を包容する團體は最も繁昌すべく、又子孫の最大數を興起するであらう』(種の起原第二段一六二頁)かくて各個と總團間の競爭を主張する所の、偏狹なるマルサス思想より起つた此文字は自然を解する人の心中に於て其偏狹な意義を喪失した。

(二)ダーヰン

不幸にして、最も豐富なる研究の基礎たる可かりし此等の說話は、眞實の生存競爭の結果を證明する目的の爲に集められたる多數事實の爲に隱蔽せられた。又、ダーヰンは動物界の生存競爭の上に現はるゝ此二狀態(爭鬪と協同)の輕重比較の精査を企圖しなかつた。而して又、彼は自ら過度なる繁殖の自然的阻止に就て書かんと揚言せし所の其著作をも遂に著さなかつた。而も其著作は個生競爭の眞實の意義を批判すべき試金石であつたであらうに。否な、先きに記せし頁に於て——マルサスの偏狹なる競爭說を打破せんとする要素中に、其尊きマルサス主義は再現して居たのである——即ち、ダーヰンが、吾が文明社會に於ては『心身の虛弱なる者は、到底存續し難し』との說話に再現したのである。身體虛弱なる詩人、科學者、發明家、改良家の多數人と等しく、所謂愚者と柔弱なる心の狂熱家の多數も亦た、其智識的道德的武裝を以てする生存競爭に使用せられて、甚だ貴重なる武器とはならない、とはダーヰン自ら『人の由來』の同一章中に高調せし所である。

(三)ダーヰン信徒

人類關係の上に一の結果を及ぼすべき學說に何時も生ずる如き事件が、ダーヰンの學說上にも起つた。即ち、彼の門弟は、彼の暗示に從て之を擴張せずして却て一層之を偏狹にしたのである。而してハーバート、スペンサー(之と密接並行の方途に立て而も自ら獨立せる)は、『何人が最適者なる乎』てふ大問題の研究を擴張せんと企てたが、(殊に『倫理の基礎』の第二段の增補に於て)無數なるダーヰンの門弟等は生存競爭の意義を最狹義まで制限した。彼等はかくて考ふらく、動物の世界は是れ互に他の血に飢ゑ渴けるもの、永久爭鬪の世界であると。彼等は近世文學をして、敗北者の悲鳴慟哭の叫に震盪せしめ、之を以て恰も近世生物學の究極の語なるが如く感ぜしめた。彼等は個人的利益の爲にする無慈悲なる爭鬪を生物ノ原理の最高位に移した。相互排斥を基礎とする世界に於て此の避く可からざる法則の下に於ては、人は到底之に服從せざるを得ぬと言ふのである。陳腐なる經說より借り來れる僅少なる語句の外、自然科學に就て知る所無き經濟學者はさて措きて、吾人は假令、ダーヰン主義の最も有力者すら、且つ極力此の誤謬思想の維持に努めたとを認めざるを得ない。實際に、吾等今進化論の最有力なる大家と稱せらるゝハックスレーに就て見んか、彼等は彼が『Struggle for Existence and its Bearing upon Man』の一頁に於て左の如く敎られてるでは無か。『道德家の觀察點より見れば、動物界は恰も格鬪技と同樣の光景を呈するであろう。萬物は能く公平に處理せらる。而して戰ふべく養へられてある。かくて此處に最强者、最敏捷者、最狡猾者は他日戰ふべく生存する』更に同論文の後所に於て、彼は動物中に於けると同じく最初の人類に關して次の如く說いたではないか。『最も軟弱にして最も頑迷なる者は進退谷まり、最も根氣强くして最も狡猾なる者——他の道には最善で無くとも、其周圍に對抗するに最適當なる者——は存續する。人生は自由鬪爭の繼續であつた。而して制限ある一時的なる家族關係以外、相互間のホッブス的戰爭が即ち生存の常狀であつた』

(四)ハックスレーとルーソー

此の自然觀が如何程まで事實上に依據するかは、動物界並に原始人類に關して既に讀者に提供せらるべき證據よりして明かにせらるゝであらう。且つ、ハックスレーの自然觀が、彼の『自然には唯だ愛と、平和と、調和のみありしが、人類增加に從て破壞せられしを見たる、ルーソー』の反對的觀察と同じく、其科學的推論として採るべきもの、甚だ尠ないとは直ちに明白となるであらう。實に、彼の森林中に初めて步行するも、動物社會を初めて觀察するも、若くは動物生活に關する眞面目なる著作を通讀するも、要するに動物の社會的生活に關する非自然主義者の思考に反對する外は無く、而して自然界に於て唯だ調和と平和の外何物をも見ずと言ふ如きと無からしむると同時に、自然界を單に同族屠殺の術と見る如きと無からしむるのである。ルーソーは其思想中より爪牙の戰爭を除斥する誤謬に陷り、而してハックスレーは之と反對する誤謬に陷つた。故にルーソーの樂天主義もハックスレーの厭世主義も共に公平なる自然の解釋として之を承認することが出來ぬ。

(五)相互扶助

吾人若し動物を研究せんか——單に實驗室や博物館内のみならず、森林や草原、高原や山岳に於て——吾人は直ちに次の如く會得する。假設種々なる種屬中、殊に種々なる動物中に爭鬪と排他の事實が夥しく存するとも、之と同時に、其れだけ多く、寧ろより多く、同じ種類の動物中に、少くとも同じ社會の動物中に、相互保護、相互扶助、相互防衛の事實があると。協同は爭鬪と共に自然の法則である。素より此兩系統の事實の輕重を概略にても數學的に計上する事は甚だ困難である。されど吾人若し之を間接の批判に問はんとならば、自然に對つて『誰が適者であるか、互に何時までも相爭ふて居る者か、將た、互に助け合ふて居る者か』と問へ、吾人は直ちに、相互扶助の習慣を有する動物が即ち適者であることを知るであろう。彼等は假令多く存續の幸運を有し、而して其各自の階級中に於て、智識及び身體組織を最高度に開發せしむる。若し此意見の證據とせらるべき許多の事實を計量し來らば、吾人は容易に、相互扶助は相互爭鬪と同じく動物生活の一法則であるとを言ひ得るのである。且や進化の一要素としては、寧ろ遙かに重要なりと言ふことが出來る。更に相互扶助は出生の勢力の消費を極少にし、其種族の維持發展を確實にするは智識と品性との開發を助くるに預りて益々重要の要素となる。

(六)ケッスレル教授

ダーヰン信徒の科學者中、相互扶助が自然の一法則にして進化の首要なる要素たることを充分に理解した者は、予の知れる所では、先づ彼の有名なる露國動物學者にして、聖ペテルスブルグ大學長たりし、故ケッスレル教授である。彼は一八八〇年一月、即ち彼の死より數月前、露國自然學者大會にて演じた講話に於て其思想の開發を示した。併、多くの善事と同樣に、此の立派なる講話も僅かに露國語を以て公刊せられたばかりで、殆んど世に知られずに終つた。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

色即是空

▲沒頭と集中と　（家庭週報一八一）

▲昔浦島は龍宮に遊んで三百年を過し、再び故郷に歸るに及んで、僅に贏ち得たるものは、煙の霧と空しき玉手箱のみであつた。そしてこの世の親しき父母は既に去り、なつかしい我が家は僻さへも止めなかつたといふ。誠に浦島は無類な沒頭家である。

▲沒頭と集中と共に同じく一方に精力を傾注するの謂ではあるが、沒頭は集中のやうに物の燒點を捉へたものではない。集中が巾廣き光線のレンズを通つて出來る燒點とすれば、沒頭はレンズを通らない狹い光線である。集中は巾廣くして中心あり、沒頭は巾狹くして中心なし。

▲故に沒頭の無益なる事は浦島の比喩に漏れない而して集中は古來偉業を爲し遂げた者の、必ず力を借りた利器である。

▲連々大發見、大發明、若しくは文學上の大作が天よりの奇しき靈感を享けて、一瞬時の集中によつて出來たやうに思はれるものがないではないが然しその一瞬時の集中力の最も高調に達した時といふのに過ぎない。必ずその人は日頃それに關して廣く、深く、遠く其の材料を集めて居りその材料は久しい間彼れの腦裏に胸底に醱酵して居つたに相違ない。即ち常始終集中の人であるのである。

▲ダウヰンと殆ど同時に進化論を發見したワラスは、當時恰も東印度の一島にあつて劇しい間歇熱に犯され、病床に呻吟中、不圖人間の種の起元に想ひ及んで、種々推究考慮する處ありて、僅か二時間の餘、全くこの一大議論を組立てた。而して病苦を忘れてその日夕から稿を起し二晝夜の後には脫稿してしまつた。

▲然しワラスが夢中に受けた暗示は決して偶然のものではなかつた。彼れがその立論の出發點は、數年前讀んだマルサスの人口原論中の所說であつたと云ふ。而して之れに照明を與へた者は、必ずや彼れが久しく東印度の群島に材料を蒐集した動物に對する豐富な智識であつたらうと思はれる。殊に彼れはその發見の二三年前から、當時倫敦を去る十六哩のダオレの閑居に研究を積んで居つた同志の友ダウヰンと常に文通して、種の起元に關する議論を交換して居つたといふ。之れによつて見ても彼れの發見は夢中に授けられたものではなくて、彼れの巾廣き經驗の產物であり、彼れの集中的生活の賜であると云はなくてはならぬ。

▲佛と覺　（楠　秀丸　氏）

「どうも頂ける樣で頂けぬ、佛になれませぬといふ解は、何れの地方でも多くの他力御信徒が申合せる樣に出る言で本より廣大の佛の慈悲に對しては言語道斷の言とか、一と口にそれは自力根性の拔けぬ故とか、御慈悲が御慈悲と知られぬからと一喝して仕舞へばそれまでゝあるが、然しつく〴〵また考へてみれば、之は一夜漬けに思ひ出した輕々しい言でなく、學術の如何は兎もあれ多くは五十年六十年人生のあらゆる經驗を甞め盡し、しかも修養の道程、惡戰苦鬪した結果吐かれたる辭であると思へば、私共は輕々しく看過してはならぬ」

「妙な話しであるが、私は此頃は、知らず〴〵と云ふことが怖い。人は好んで墮落するものではないが知らず〴〵墮落するのである。發展は我を捨て知らず〴〵救ひ來るのである。修養を說かんとすれば知らず〴〵口の先にも現はれる原稿を書かんとすれば筆の先にも知らず〴〵襲ひ來るのである。而も其來るや一刹那閒髮を容れぬのである。永劫の觀を呼び出すも一刹那である、自己を殺すも一刹那である、自己を活かすも一刹那である、百千の魔王を招くも一刹那である。それで私は修養と云ことを味ふにつけ、今日まで知らず〴〵輕視したことを恥ぢるのである。人生一代は輕視せぬが、一年は輕視し易いのである。一年は輕視せぬが、一月は輕視するのである。一月は輕視せぬが、一日は輕視するのである。一日は輕視せぬが、一時一刹那は輕視するのである。而も一回一刹那を輕視する心が、知らず〴〵一月を輕視し一年を輕視し、一生を輕視して行くのである」

「佛恩は深重であると言ふて自分こそ金剛堅固の信心を得たと喜んだこともある。ところがあとから考へて見れば、佛をつかんだと思ふたのは、存外知らず〴〵惡魔をつかんで居たのである。眞實を捕へたと思ふたのは知らず知らず僞を捕へたのである。わてになると思ふて居たことが知らず〴〵わてがはづれて居るのであつた」

「修養は結構ではあるが、若し惡く執すれば知らず〴〵修養に病を帶んで來る。故に深く注意せねばならぬことであると思ふ」

「喜ばしき聲の下に、悲みの涙を生ぜしめることがある。惡魔を拜んだ、佛を吸き出すことがある。魔となるか佛となるかは、知らず〴〵の一刹那である。小子は知らずに親の膝に抱かれて居るのである」（無盡燈十四の三）

▲依賴心と虛榮心　（宮田　脩　氏）

「仍て此頃の新聞を讀んで婦人界の事を見ると、一日として悲憤に堪へぬ記事の載つて居ぬ事はなく、將來の婦人界を思ふと轉ろに寒心を催さぬ日とてはない。廿歲の少女が六十七歲の老人に嫁さうとした事件の如き、數名の婦人が、破廉恥漢に誘惑されて婦人の本領たる節操の美德を蹂躙された事件の如き、誰か是を讀んで對岸の火災視することが出來やうぞ。夫も眼に一丁の字なく心の修練を缺いて居る無知無識の女子ならまだしも、何れも高等女學校程度の教育を受け、現代文明の空氣に吹かれて居る明治の婦人であるを聞いては、なほ一層看過することが出來まいじやないか。私は是等の事件を以て明治の婦人界に印せられた一大侮辱と見る、皆さんは肩に唾して愈々反省し益々決心して、與へられた此一大恨事を拭はなければなるまい」

「昔袈裟御前は貞操の美德を汚されまいとして、遠藤武者盛遠の刄に伏した、武士道の婦人は「貞婦兩夫に見えず」との教訓によつて、生涯孤獨の生活を送つたものがある。其心根の可憐なるは察するに餘りあるが其志の崇高なるは仰げば仰ぐ程いや高きを覺えずに居られやうか。生死の境をものゝ數ともせず、矢叫の聲を衝うた武夫の前には、知らず識らず頭の下がることを禁じ得ない。同時に貞烈凛乎たる婦人の前には覺えず讃嘆の聲の湧き出づるのを禁じ得ない。袈裟御前は偉らい人であつた。武士道の婦人は氣高かつた。袈裟は此の如く秋霜烈日の志操を持つて居たればこそ、當時の荒くれ武者をも發心させ得たのである。試に「源平盛衰記」を繙いて、彼女の性行を讀んで覽られよ。其壯烈悲愴なことは、人をして襟を正さずには居られぬ。徒に優美柔順のみが女子の本領と思つてはならぬ。此壯烈堅實な點に婦人の本領がつゝまれて居るのである。（明治の婦人五の二）

春の歌　旭　山　人

○春來ぬと獄窓の友は言ひ越しぬ[illegible]の花皿に咲くや君

○風吹きて萬花繚亂の春來ぬと獄窓につげよ革命の友

○春雨の霽れて雲霧もゆるとき獄窓の女は肉殺げ落ちぬ

○わかつきの夢にも見にき朧なる月にも似たる君が面かな

○怖る怖る君が情に會ひ初めき桃の花咲く春雨の夜

○梅一輪まへ齒にかみぬ乙女子は誰に捧げん其[illegible]を

○春の夜の悲しき夢ぞと君ゆるせ吾は罪の身を創りぬ

○[illegible]〴〵豚々の風やわらかく梅が枝に宿りし月の影おぼろなり

○戀しとも思ひはせねど唯だ淋し世を捨てゝ人と絕ちし此身は

○春雨をきゝつ終日讀みしが、その今日小兒と野に遊ぶかな

○ヒラリ〳〵天くだりしか双胡蝶、羽かろく舞ふ菜の花の園

○双胡蝶舞ふや菜の花、園守は、手枕の夢いと深うして

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

▲四月號▶

新小說

續編 尼か紅……泉　鏡花
月夜……上司　小劍
鬼……薄田　泣菫
マルパ……ゴリキー作 中村孤月譯
近代の道德說　上田　敏
猫と文學　片山孤村
文藝の保護　平田禿木
文明の批評　樋口龍峽
讀書餘錄　中島孤島
電小僧を論す……青柳　有美
椿山の畫論……梅澤　和軒
美術院の設立を望む……黑田　淸輝
文藝革新會起る……後藤　宙外
△寸鐵　老年の呪咀●快心の文字●野生の美●文壇廓淸の第一歩
內股文士●抱月先生●新聞文學
▼文士劇協會贋阿彌▼香道初步都築成幸▼骨董美噺月▼花見衣流行子▼三月の雜誌

▼殘部僅少　至急乞御注文
●石版刷、三色版等、寫眞版、數葉挿入
▽一册郵稅共二十七錢
▽六册分一圓五十九錢

東京市日本橋
春陽堂

北原白秋著
新詩集
邪宗門

『挿畫』
石井柏亭
太田正雄
山本鼎
石井柏亭

混亂せる詩界に嶄然頭角を現し來りたる白秋氏の第一集也六章百三十篇の詩皆著者の心血を絞りたるものならざるはなし近時の美本

定價壹圓郵稅八錢

東京麴町區飯田町
易風社
振替一二〇三四番

弊店儀、一昨年來、着々事業を擴張し改良し、西洋料理、ホテル業の外、廣く公衆の遊覽所を設け、衛生に注意し、風儀を高尙にし、貴顯紳士、御婦人御小供の御來遊に便利を計り、敎育的圖書縱覽所まで開設致候、今や上野東臺の櫻花當に爛熳たり、四方の雅客、希くは一日の淸遊を吝むこと勿れ、

洋食定價
△朝食　七十錢
△晝食　壹圓三十錢
△夕食　壹圓五十錢
△一品　三十錢

上野精養軒

淚紅醫院長
醫士　一瀨鷹一
一院　日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院　神田區連雀町十八番地
學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

齒科治療　自午前八時至午後十時
吉瀨齒科醫院
院主　吉瀨才一郎
東京市神田須田町二十六番地
（萬世橋內右横町）
●藥價手術料共半額
●貧困者施療

小兒科
內科
婦人科
每日自午前八時至午後六時
淺草區馬道町三丁目
小牧醫院

自四月一日
至四月三十日

天賞堂春季大賣出し

御購求額五圓に對して壹等景品百圓切手
百圓宛廿枚
二等景品同く五拾圓宛廿枚
（一本もカラクジなし景品割合の詳細は三月卅日の時事新報廣告參照あれ）

御購求額壹圓に對して壹等景品切手廿圓宛廿枚
二等景品同く拾圓宛貳拾枚
（一本もカラクジなし景品割合の詳細は三月卅日の時事新報紙上廣告參照あれ）

◎定價　△一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓△申込は總て前金の事
發行兼編輯人　東京府豊多摩郡淀橋町角筈七三八番地　石川三四郎
印刷人　東京市牛込區赤城下町五六番地　井口正之
發行所　東京府豊多摩郡淀橋町角筈七三八番地　世界婦人社
印刷所　東京市神田區豊島町卅四番地　博貿堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY